

古代日本における座具、及び寝具

——やまとことばの語彙と漢語受容の分析から

西澤 治彦

- 一 はじめに
- 二 中国における座具の変遷
- 三 古代日本における座具、及び寝具
 - 1 寝床としての「とこ」
 - 2 「みまし」(御席・御座)・「おまし」(御座)・「いざし」(御座)
 - (1) 敬語の「み」「お」「こ」
 - (2) 「み」の系統
 - (3) 「お」の系統
 - (4) 「こ」の系統
 - 3 総称としての「しきもの」
 - 4 「むしろ」「たたみ」「しとね」「あぐら」「ふすま」「いざし」「わろうだ」「ひざつき」「蒲団」

四 結語

- (1) むしろ
- (2) たたみ
- (3) あぐら
- (4) しとね (茵・褥)
- (5) ふすま (衾・被)
- (6) わろうだ
- (7) ひざつき
- (8) ふとん
- (9) まとめ
- 5 「榻」「胡床」「床子」「墩」「兀子」「椅子」
- (1) 榻
- (2) 胡床
- (3) 床子
- (4) 兀子
- (5) 草墊・草墩
- (6) 椅子

注

文献リスト

一 はじめに

私は長年に渡って、坐法を中心とする身体技法の人類学的な研究をすすめてきたが、近年は、「やまとことばにみえる日本人の身体技法」の研究に取り組んでいる。そして、その過程で、坐法の研究には当然のことながら、座具の研究も欠かせないことに思い至り、研究の前段階として、古代日本における座具、及び寝具の歴史を整理しておくことにした。

古代の日本は、さまざまな面で中国から影響を受けており、座具や寝具も例外ではない。従って、古代日本の座具や寝具については、中国からの影響を考慮に入れないわけにはいかない。その一方で、漢語の要素を丁寧に剥がしていくことによって、日本固有の座具や寝具がどのようなものであったのかが見えてもくる。

本稿は、こうした観点から、中国の座具や寝具との比較を通して、古代日本における座具や寝具がどのようなものであり、またどのように変化していったのかを明らかにしたい。^(注2)

二 中国における座具の変遷

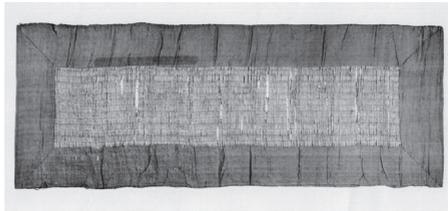
中国古代の「席」や「筵」、「床」〔牀〕が本字であるが、以下「床」で統一する^(注1)と「榻」、さらには「胡床」や「椅子」が日本にもたらされ、その結果、日本人の坐り方にも一定の変化が生じている。以下、先ず、中国における座具の変遷を簡単に見ておきたい。^(注1)

中国古代において、平座が一般的であった時代における敷物は、「席」^(せき)と「筵」^(えん)であった。席の使用を文献で確

認できるのは周代以降であるが、その起源は殷代まで遡ろう。席の大きさは一人用から四人用までさまざまであった。「席」の素材に関しては、漢代の桓寛^{かんかん}編の『塩鉄論』に、時代による変遷の記述がある。古くは皮・毛・草の敷物で、その後、毛織物や蒲などで編んだものになるが、社会階層によって用いる素材が異なっていた。さらに、周代の礼制では席の使用に対して厳格な等級を設けていて、『礼記』には、天子の席は五重、諸侯の席は三重、大夫の席は二重に敷くとあり、身分によって重なる枚数が異なった。その後、席の等級意識も徐々に薄れ、室内には席を一枚重ねるだけとなった。席は、夜は寝具にもなった。『礼記』にみえる「男女七歳不同席」（生まれて七年経ったら、男女は同じ席を使わせない）とは、このことをいう。その後、下に敷く比較的広い敷物を「筵」と呼び、上に敷く小さなものを席と呼びわけ、両者を併せて「筵席」と呼ぶようになった。

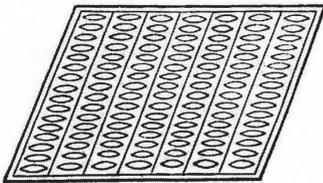
座具としては席とともに、周代の初めより、木製の低い台である「床^{しよ}」が用いられるようになった。後漢の『説文解字』には床を、「身を休めるもの」と、『釋名^{しやくめい}』には、「人が坐したり寝たりするものを床」とあり、床には寝台用の

【図1】 席



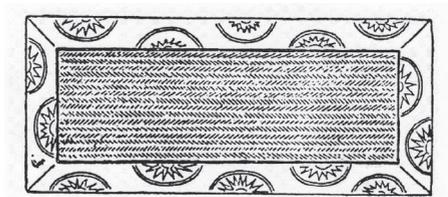
長沙馬王堆漢墓より出土した蔦席 前2世紀
「長沙馬王堆一号漢墓」(下集)より

【図3】 筵のスケッチ



『中国社会風俗史』より

【図2】 席



席のスケッチ
『中国社会風俗史』より

「臥床^{がしやう}」と腰掛け用の「坐床」とがあった。床に坐る場合、尻だけ乗せて、両脚を前に投げ出す坐り方もあった。なお、成句の「同床異夢」は、この「臥床」を共にすることから生まれたものである。

漢末になると、席と床のほかに、「榻^た」が用いられ始める。実際、『史記』や『漢書』には見えなかった榻が、『後漢書』になると登場する。【図4】をみると、床の前には少し低くなった長い台が描かれている。これを「榻登」といい、床や榻の上り下りの際の踏み台とした。後世になると榻はほとんど床と同義で使われているが、当時は、榻は床に比べて細長かった。『釈名』には「床のうち」細長く低いものを榻という」とある。榻は人が坐るものであるが、床と同様、寝台にも用いられた。薄い席を地上に敷いていたのと比べ、床や榻は気持ちよく、当初はその上に何も敷かず、大抵は裸足で膝を折り曲げて坐した。榻は人が坐るものであるが、床と同様、寝台にも用いられた。床、榻とも必ずしも一人で坐るものではなく、時には一つの榻に複数で坐ることもあった。盛大な宴会を開くときには、榻を横に連ねて坐ったり、榻を向かい合わせて酒を酌み交わせるようにすることもあった。これを「連榻」または「合榻^(注4)」といった。一方、一人で使うものは「独床」「独榻」と呼び、その使用は尊者に限られていた。^(注5)

藤田豊八によると、「大床」の前に榻を置いて、これに登る階段として使っ

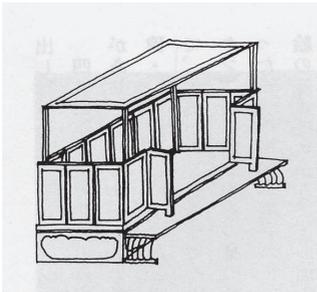
【図4】臥床



顧愷之（東晋）の作とされる「女史箴図」にみえる臥床

『中国美術全集』 絵画編1 原始社会至南北絵画より

【図5】臥床



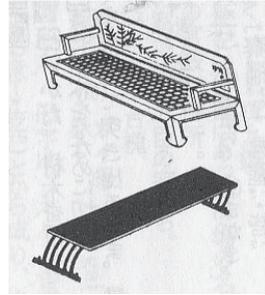
「女史箴図」の臥床のスケッチ
『屏風のなかの壺中天』より

たり、例外的に、足を洗う際に後世の椅子式に似た座り方をしたことが記録に残されている。^(注①)「榻登」と呼ばれるものがこれにあたる。

尊者が一人で榻に坐っている例が【図8】である。これは、唐の閻立本の作と言われている、前漢の昭帝から随の煬帝まで歴代一三人の帝王を描いた「歴代帝王図」の部分で、右側の人物が陳の文帝像である。『中国美術全集』の解題によると、現在伝わっている「歴代帝王図」は宋代になって楊褒が唐画を模写したものと考えられている。

一つの榻に複数の人間が坐っている例が【図9】である。これは北斉の「北斉校書図巻」の部分で、作者は不明。『中国美術全集』の解説によ

【図6】 榻のスケッチ



下に描かれているのは「榻登」にもなった
『新字源』より

【図7】 榻の実物



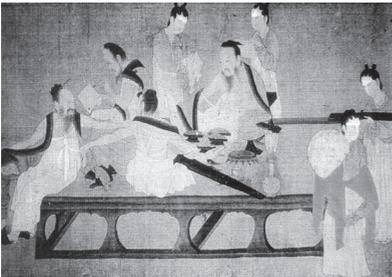
但しこれは明代のもの。明代にはこうした家具の複製が多く作られた
『明清家具集珍』より

【図8】 榻に坐る帝王



「歴代帝王図」(部分)
『中国美術全集』 絵画編2 隋唐五代絵画より

【図9】 榻に複数人が坐っている様子



『中国美術全集』 絵画編1 原始社会至南北朝絵画より

ると、北斉天保七年（西暦五五六年）、文宣帝高洋が樊遜はんそんなどに命じて五經諸史の校訂刊行作業を命じたという故事を描いたもの。榻の上には、圓足硯、酒杯、琴具、投壺などが無造作に置かれている。榻の上には坐っている三人はあくらをかいているようにみえる。榻から下りようとする人物が靴を履こうとしていることから、榻に登る際には靴を脱いでいたことが確認できる。

こうした前史を経て、魏晋南北朝になると、床、榻に加え、「胡床」が普及していく。藤田豊八によれば、当時、胡人はほとんど外人と同義であり、西域諸国はもとより鮮卑などの東胡の種族も胡人であった。魏人は鮮卑であり、彼ら騎馬人種が膝を屈することは余程の困難であり、極力漢人化に努めても、垂脚（脚を真つ直ぐに伸ばす）の

風俗は容易に改め得なかつたものであるう、としている。その胡人が用いた座具が胡床である。従って、これは漢人側からの他称である。藤田は、胡床は当初、獵場、樓上、船中、屋外で用いられ、一定の場所に設けられる床や榻と異なり、運搬に便利であり、一人用であった。胡床の実体は、交椅、校椅の文字か

【図 11】 胡床に坐る様子



北斉〈校書図〉中の胡床
『中国家具』より

【図 12】 胡床に坐る様子



交椅に腰掛けて治療を受けている女性（山西省の壁画 17～18 世紀）
『中国古典家具與生活環境』より

【図 10】 胡床（交机）



有踏林交机（写真は明代のもの）
『明式家具研究』より

ら、横木を交差して紐で連ね、折り畳んで携帯できた腰掛であったとする。そして、ギリシャ、ローマでは古代より椅子を用いており、胡床は西アジア、中央アジアの遊牧民の手を経て中国に入ったものと思われる。後の西夏人や契丹人も椅子を常用としていた、^(注7)としていた。

もつとも、「胡床」が文献上、最初に見えるのは後漢の靈帝（二六八―一八八）の時代であった。即ち、『和名類聚抄』（九三四頃）が「胡床―風俗通云靈帝好胡服京師皆作胡床」（胡床―風俗通に云ふ。靈帝胡服を好み、京師皆胡床^{阿具良}を作る）と、『風俗通義』（後漢末の応劭著）から引いている文章がそれである。この原文は、『後漢書』にみえる。即ち、志第十三に「靈帝好胡服、胡帳、胡床、胡坐、胡飯、胡空侯、胡笛、胡舞、京都貴戚皆競為之」（靈帝は胡服、胡帳、胡牀、胡坐、胡飯、胡空侯、胡笛、胡舞などを好み、都にいる君主の親戚らは皆、競って之にならった）と見える。^(注8)この場合の「胡坐」が何を指すかであるが、跪坐をしない異民族の坐法の総称として「夷踞」があったことを考えると、胡人のように平座したともとれる。しかしながら、「胡床」と並列されると、少なくともこの文章では「胡床」に腰掛けるのを好んだ、という意味にとれる。この時代の「胡」とは、異民族を侮蔑する意味は全くなく、むしろ先進的な西アジアの文物を指し、漢人にとって憧れの的であった。喩えて言うなら、日本から見ただ「唐物」や「舶来品」に相当した。新し物好きな靈帝が権力の象徴として好んで異国の服装である胡服をまとい、人々が平座しているなかで、西アジアからもたらされた胡床の上に腰掛けて坐るのを好んだ、ということであろう。史記や漢書などの正史には「胡坐」という熟語は見えず、唯一、『後漢書』にこの靈帝の逸話として登場することからも、当時においてこれは特殊な例であったと思われる。

このように、胡床の坐法は、中国の伝統的な跪座とは異なり、胡床の上にお尻を乗せ、両脚を垂らすという坐り方であった。藤田豊八も、胡床には今日の椅子のように坐ったため、胡床には〔当初は〕「坐」の字でなく、「踞」

の字が用いられた。これは当時、常に床もしくは榻に平座した人々にとつては、非常に奇妙であったようである、^(注9)としてゐる。胡床を最初に用いたのが皇帝であった如く、当初は権力者のみが使用することができたが、隋唐以後になると胡床は家庭にも普及していった。

胡床は、中国において平座から椅子座へ移行するうえで、一つの契機となった座具である。北宋の司馬光編の『資治通鑑』の「唐紀」に胡床の記述がある。即ち、従来の「胡床」が、(異民族である) 隋王朝が胡の字を憚ったため「交床」と改名されたこと、「交床」は別に「繩床」というところがある。ところが、その注に、両者は別物であるとし、横木と布や皮で作る胡床に対し、繩床は、板でもって之を作り、その上に人が坐る。その広々とした前方に膝が収まり、後には背もたれがあり、左右には手を乗せる台があつて肘を乗せることができる、^(注10)としてゐる。

胡床から交床への名称変更も興味深いが、注目されるのは、繩床の形状が今日の椅子と同じであるという点である。唐の穆宗が紫宸殿において大繩床に坐り群臣とまみえた、とあることから、これが折りたたみ式の簡便な座具でないことは確かであろう。胡床のように繩を使つていないにもかかわらず、なぜ「繩床」と呼んだのかという疑問は残るが、胡床、交床を媒介として、椅子としての形状を備えた座具が誕生した過程を記す貴重な史料といえよう。

ところで、「繩床」であるが、僧侶が繩床に坐つて修業をしたという話が、北魏時代の洛陽の寺院を記した『洛陽伽藍記』に見える。禪寺で用いられた座具は「禪床」もしくは「禪榻」とも呼ばれ、座禪用の座具であった。「繩床」は小さく軽かったため、簡単に持ち運びができた。僧侶はこの上に「結跏」(「跏趺」「跏坐」と同じで、足の甲を反対側の太股の上に乗せる座り方) することもあれば、腰掛けて足を投げ出して坐つてもいたようである。^(注11)

「胡床」を最初に用いたのが皇帝であった如く、当初は権力者のみが使用することができたわけであるが、「禪

床」の例は、寺院という限られた空間の中ではあったが、僧侶らもこうした腰掛けに早くから坐っていたことになる。こうしてみると、椅子座への移行には、西アジアからの胡床のみならず、仏教寺院における「西方（即ちインド）」からの「禅床」の影響という、もう一つのルートが存在したことも考えられそうである。後の椅子の普及の過程を見ても、皇帝や高級官僚と並んで、寺院の中では高僧が椅子座をしていたこともその傍証となる。

鎌倉時代、日本に渡来した禅僧らも、椅子に座っていた姿が描かれている。(注12)

魏晋南北朝から始まった座具の革新は、隋唐代に至って最高潮に達する。伝統的な床や榻、几や案などはその脚部を長く変化させながら、継続して生産されていた一方で、椅子や卓子が使用され始める。藤田豊八も、唐末五代に入ると、胡床に対して別に「倚」や「椅」などの字が用いられるようになったとしている。(注13)

尚秉和は、椅子や兀子(こし)（背もたれのない方形の腰掛け）の普及が宋代に起こったとし、いくつかの例を挙げている。南宋の陸游が著した『老学庵筆記』に見える、高宗が徽宗(きそう)の喪服中に白木の椅子を使ったという話や、『宋史』の「后妃伝」に見える逸話を紹介し、宋初には皇后だけが漆塗りの椅子を使用できたとしている。

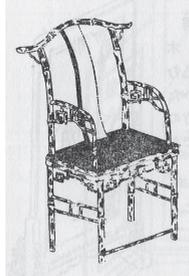
なお、背もたれのない腰掛けとしては、「兀子(こし)」の他に、「墩・塾」や「凳・櫈」がある。「墩・塾」(dun) は、『大漢和辞典』によると、平地の小高い積土を意味したが、他に現在でも使われている字義として「こしかけ」「台

【図13】椅子のスケッチ



五代画「勘書図」（王齋翰矩作）
『中国家具』より

【図14】竹椅（竹製の椅子）



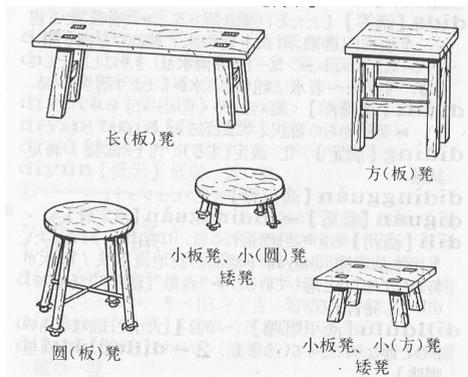
『清俗紀聞』より

の意味をあげている。もつとも、小学館の『中日辞典』で「墩」を引くと、「こしかけ」の字義をあげていない。

「凳」(deng) は、『大漢和辞典』によると、「橙」とも作り、①腰掛けの類い、②ひじかけの類い、としている。「墩」や「凳」は『大漢和辞典』では古典からの用例をあげておらず、経典や史書にはあまり登場しなかったようである。おそらく現代漢語でも「凳子」と言うが、「こ子」というのは俗称であり、当時の文人が文章に書き残すことは少なかったであろう。なお、小学館の『中日辞典』では「凳子・凳児」を、背もたれのない腰掛けとし、形状による名称の違いを図示している。

凳子が木製であったのに対し、「墩」は土偏がついていることから、積み上げられた土の如く、より簡便なものであったと推測される。対して「兀子」は精緻に製作された格上の座具であった。尚秉和は『宋史』の「丁謂伝」に見える、「墩」と「兀子」の違いを示す逸話を紹介している。即ち、復職が許され、登庁して座を賜った丁謂に、左右の者が墩を設けたので、宰相の職に復位したことを告げると、改めて兀子を勧めてきたという。このことから、「兀子」は宋初において宰相以外には用いられないほど貴いものであったとしている。また、『老学庵筆記』に見える、かつて「北宋時」、士大夫の家では、婦女が椅子や兀子こしに座ると、人は皆その規範の無さを譏そり笑ったという一文を紹介し、それから一〇〇年以上も経った南宋の頃になると、椅子や兀子は士庶人の家庭にもゆき渡ったとしている。(注1)

【図 15】 さまざまな形状の凳子



『小学館 中日辞典』より

こうして中国人は、魏晋南北朝時代から宋代までの約七〇〇年間という長い時間を経て、胡人の胡床を媒介として、段階的に平座の習慣から椅子座へと移行していった。つまり、筵席を敷いて坐る方式を基本的に放棄し、椅子に坐る姿勢の革命的変革を最終的に完了したことになる。

なお、最後に卓（漢語では桌）についても触れておきたい。魏晋南北朝以降、胡床や椅子、墩、凳、杌子などの座具が出現し始めると、これに伴って食台も高いものが作られ、唐代には長方形の長卓や方形の方卓が出現し始めた。卓の普及は、当然の事ながら、椅子座への移行と並行して起こったものであった。この変化の過程を、藤田豊八は次のように推測している。以下、要点をまとめると、「几」は元来、平座する時にもたれたものであり、几席とは関係がなかったが、魏晋になって、几席に「机」の字を用いるようになった。『三国志』「魏書華歆伝」がその初出であるが、名称の変化に伴いその製作方法や用法も漸次変化し、「机」は人がもたれる「几」と区別され、書籍文書載せるものとして、その形も「几」に比べ大きくなったようである。ところが、隋唐以降、胡床が盛んに用いられるようになると、家庭においても「机」が用いられるようになった。そして唐末五代に入ると、胡床が別に「倚」「椅」と呼ばれるようになったのと並行して、「机」も別に「卓」「桌」「楨」などの字が用いられるようになり、さらに宋代になると、俗に「椅」を「椅子」、卓を「卓子」と呼んだという。^(注15) この名称の変化を整理すると以下の【図16】のようになる。

【図16】

時代	座具	卓
隋唐	胡床	(几) 机
唐末五代	倚・椅	卓・桌・楨
宋代（俗称）	椅子	卓子

三 古代日本における座具、及び寝具

中国古代における座具の変遷をみてきたところで、いよいよ古代の日本においてどのような座具や寝具が用いられてきたかをみていきたい。^(注16)

1 寝床としての「とこ」

個々の座具に入る前に、まず「ねどこ」(寝床)としての「とこ」について整理しておきたい。『古語大辞典』によると以下のような定義がある。「とこ」(床)の字義は、時代とともに増えていき、「とこ」に「ゆか」や「床の間」「床屋」の意が加わるのは、中世、近世になってからである。

① 寝床。本来、古代の住居の土間で、周囲より一段高くなっている部分をいい、そこを寝る場所に用いたので、寝床の意となる。用例として、古事記(歌謡三三)(七二二)に「をとめの登許とこの辺に我が置きしつるきの太刀その太刀はや」と、万葉集(二六二九)(八世紀後半)に「朝には庭は出て立ち夕へには床うち払い」とある。源氏物語(末摘花)(二〇〇一〜一四頃)に「心安き独り寝のところに」と、好色一代男(二・四)(一六八二)に「床に入れなどと申して、あしらひ男先立て小座敷にゆけば」とある。

② 転じて、男女の交わり。棠大門屋敷門(三・二)(二七〇五)に「心の下紐打とくる事もなければ、床のおもしろうからう様もなく」とみえる。

③ 牛車ぎしやの、人の乗る台の部分^(注17)を指し、栄花物語(峯の月)(一〇二八〜九二頃)に「御車のとこかきおろしていはしまさせ給ふ」とある。

④ ゆか。雨月物語（蛇性の姪）（一七七六）に「然て見るに、女はいづち行きけん見えずなりにけり。此床の上に輝しき物あり」とみえる。

⑤ 床間。南方録（覚書）（一五九三頃）に「名物のかけ物所持の輩は、床の心得あり」とある。

⑥ 材木や竹を組んで一段高くしつらえた場所。また、床机（漢語の「床机」は寝台と几を指すが、日本語の「床机」は陣中などで使う折りたたみ式の腰掛けを指す）や、棧敷のようなもの。京都の四条河原町の涼床などが有名。浄瑠璃・曾根崎心中（一七〇三）に「出茶屋のどこより女の声」とある。

⑦ 髪結床。床屋。もと⑥のような簡単な所で営業したことからいう。軽口あられ酒（四）（一七〇五）に「かみゆいのわかい衆、いや、今日はとこへはゆかぬ。日手間をやといたとゆふた」とみえる。

⑧ 船で舵を取り付けたり、櫓を取り付けたりするところ。用例として、日葡辞典（一六〇三〜〇四）に「Tokko（日本の船の中にある場所で、舵をはめ込み、操る所）」とある。

このように、やまとことばの「とこ」には多くの字義があるが、もともとの字義は、古代の住居の土間で、周囲より一段高くなっている部分をいい、そこを寝る場所に用いたので、「ねどこ」の意となった。このほか、床机（折りたたみ式の腰掛け）や棧敷、牛車道具などの意味もあった。そして「とこ」は「ねどこ」から転じて、男女の共寝を意味するようにもなった。「とこ」の字義はその後も拡大していき、室町中期、客座敷を飾る設備としての押板と、茶室に貴人を請ずる上段間を床と称したが、近世になってこの両者を合体した「床の間」が生まれる。また近世には、髪結床から、床屋の字義が生まれたほか、寝床の意から転じて、とこげいしや（床芸者）など遊女関連の語彙も多数、生みだされた。

以下、「とこ」に関する熟語を項目別に列挙してみたい。「ねどこ」(寢床) に関する語彙としては、とこしき(床敷・床褥)、とこなか(床中)、とこさゆ(とこ寒ゆ)、とこなる(床慣)、とこばなれ(床離)、とこあげ(床上)、とこすずみ(床涼)、とこずれ(床摺・床擦) などがある。このうち、とこさゆ(とこ寒ゆ) は、寢床の寒さが厳しく感じられるという意で、新古今和歌集(冬)(一一〇五)に「むかし思ふさ夜のねざめの床さえて涙もこぼる袖のうへかな」とある。

【牛車道具・その他】に関しては、とこしばり(鞆・床縛)、とこね(床根) がある。

【歌語】としては、とこのうみ(床海)、とこのうらかぜ(床浦風)、とこのうらなみ(床浦波)、とこのやま(鳥籠山・床山) がある。

【男女共寝】に関しては、とこふる(とこ舊る)、とこいくさ(床軍)、とこは(ば) なる、とこいり(床入)、とこさかづき(床盃) などがある。

このうち、とこふる(とこ舊る) は夫婦が長く連れ添う意で、拾遺和歌集(哀傷)(一〇〇五〜七頃)に「年ふれどいかなる人かとこふりてあひ思う人にわかれざるらん」とある。とこは(ば) なる(床離) は、夫婦が寢床を別々にする。夫婦の間が疎くなる。用例として伊勢物語(二六)(一〇世紀前半)「年ごろあひ慣れたる妻、やうやうとこはなれて、ついに尼になりて」とある。近世になると、寢床から起き出す意となる。好色二代男(五一)(二六八四)に「まして宿よりせわしく心もつけず、床ばなれての朝、夜前の首尾互いに聞事なし」とある。

【床の間関連】としては、とこのま(床間)、とこばしら(床柱)、とこがまち(床框)、とこだたみ(床畳)、とこだな(床棚)、とこぶち(床縁)、とこまはり(床廻)、とこまるた(床丸太) などがある。

【髪結い関連】では、とこかみ(床髪)、とこか(が)みゆひ(床髪結)、とこや(床屋)、とこやま(とこやま)

などがある。

【遊女関連】では、とこげいしや(床藝者)、とこことば(床言葉)、とこさがし(床探)、とこじやうず(床上手)、とこだい(床代)、とこばな(床花)、とこぶり(床振)などがある。

『新字源』によると、漢語の「床」は「牀」の俗字で、その字義は、「尸」の中の「木」造りの部分を指す会意文字であり、①寝台、こしかけ。②ゆか、とこ、の意がある。

やまとことばの「とこ」は、もともとは古代の住居の土間で、周囲より一段高くなっている部分を指したのに対し、漢語の「床」は室内の木造りの部分を指した、とうい違いがある。ともに寝床の意味があるが、やまとことばの「とこ」に「ゆか」の意が加わるのは、一七世紀になってからである。しかも、「とこ」には、漢語の「床」にはない多くの字義が加えられていった。

これらの語彙を、初出と思われる出典の年代順に年表にしたのが、以下の図表である。

とこ(床)の熟語

古代 中世 近世
奈良～平安時代 鎌倉時代～室町時代 江戸時代～

8世紀

とこ(床)【寝床として】古事記(712)・万葉集(8世紀後半)・源氏物語(1001～14頃)・日葡辞典(1603～04)
とこのやま(鳥籠山・床山)日本書紀(720)
とこしき(床敷・床褥)日本書紀(720)・和漢船用集(1766)

10世紀

とこなか(床中)古今和歌集(905～14)
とこ(床)【牛車台として】和名類聚抄(934頃)・栄花物語(1028～92頃)
とこしほり(轉・床縛)和名類聚抄(934頃)・落窪物語(10世紀後半)
とこは(ば)なる伊勢物語(10世紀前半)・正徹千首(1473以後)・好色二代男(1684)

11世紀

とこふる(とこ^まふる)拾遺和歌集(1005～7頃)
とこね(床根)作庭記(11世紀後半)

13世紀

とこさゆ(とこ^まさゆ)新古今和歌集(1205)
とこなる(床慣)建礼門院右京大夫集(1232)
とこのうみ(床海)玉吟集(1245)
とこのうらかぜ(床浦風)拾遺愚草(1216～33頃)・続古今和歌集(1265)
とこのうらなみ(床浦波)続古今和歌集(1265)

14世紀

とこのま(床間)教言卿記(1405～10)・貞丈雜記(1843)

16世紀

とこ(床)【床間として】南方録(1593頃)・日葡辞典(1603～04)・誹諧・続境海草(江戸前期)
とこがまち(床框)日葡辞典(1603～04)・梅酒十歌仙(1679)

17世紀

とこ(床)【ゆかとして】雨月物語(1776)
とこ(床)【舵や櫓を付ける所】日葡辞典(1603～04)・和漢船用集(1766)
とこだな(床柵)五輪書(1643～45)
とこだたみ(床畳)貞徳翁独吟百韻自註(1663)
とこいり(床入)好色一代女(1686)・金門五三桐(1778)・月下清談(1798)
とこじやうず(床上手)好色一代男(1682)・都名所図会(1780)講諧・五車反古(1783)
とこぶり(床振)好色一代男(1682)
とこことば(床言葉)好色一代女(1686)
とこか(か)みゆひ(床髮結)浮世草子・櫻硯(1687)・守貞漫稿(1837～53稿)

18世紀

とこ(床)【棧敷として】浄瑠璃會根崎心中(1703)
とこ(床)【房事として】大尺三つ盃(1704)・棠大門屋敷門(1705)
とこ(床)【ゆかとして】雨月物語(1776)
とこずれ(床摺・床擦)艶道通鑑(1715)
とこあげ(床上)役者芸相撲(1719)・南総里見八犬伝(1814～42)
とこばなれ(床離)誹諧・金竜山(1716～36)

- とこさがし (床探) 元禄太平記 (1702)
とこだい (床代) 浮世草子・本朝浜千鳥 (1707)
とこげいしや (床藝者) 雑俳・柳多留 (1765～1848)
とこ (床) 【髪結床として】軽口あられ酒 (1705)・軽口腹太鼓 (1705)
とこかみ (床髪) 軽口笑布袋 (1747)
とこやま (とこやま) 新整欣々雅話 (1799)
とこみせ (床見世・床見世) 柳多留 (1765～1840)

19世紀

- とこや (床屋) 講譜・河衛^{かわちどり} (月居七部集所収 1828)
とこばな (床花) 絵本小夜時雨 (1801)・守貞漫稿 (1837～53稿)
とこさかづき (床盃) 貞丈雑記 (1843)・歌舞伎小袖曾根我葡色縫 (1858)・農家調宝記続録 (江戸後期)・古事類苑 (1869～1914)

※太字は現在も使われている語

こうしてみると、「とこ」は当初は、主に「ねどこ」(寢床)の意味であったが、一四世紀に「床の間」が登場し、一七世紀になると、「ゆか」の意味で「とこ」が使われるようになる。また、同じく一七世紀以降、「とこじやうず(床上手)」などの遊女関係の語彙や、髪結床から、床屋の字義も加わっていったことが分かる。

なお、ここで「ゆか」(床)についても触れておきたい。やまとことばの「とこ」と「ゆか」は本来、微妙に字義の異なる語彙であったが、共に「床」と漢訳してしまったため、両者が漢字を通して相繋がってしまい、ややこしいことになった。もともと、同じ「床」を当てたということは、もともと近い字義ではあった。ではその違いはどこにあったのか。

『古語大辞典』によると、「ゆか」(床)には以下のような字義がある。

- ① 建築内で、土間に対して一段、高くつくられた広がり。平安時代に仏堂や住宅建築では、通板敷^{いたじき}とよび、母屋^{もや}のそれは高く、庇^{ひどし}のそれは一段低くなっている。上代の宮殿・寺院、また一般の民家では、この板敷床に対して、土間床が行われ、また鎌倉時代には、禅宗の影響で再び土間床の寺院建築が見られる。土間床は石や瓦で表面が舗装される。
- ② 室内の坐臥具の一つ。土間床・板敷床ともに用いる貴人用の坐臥具。

木製で脚のある低い台。対して、「とこ」には脚がなく、敷物などを置き重ねてその上に臥すものであり、「草蓐」とこ」というように、鳥獸の臥す所にもいう。なお、帳台の浜床も、ゆかの一種である。用例として、源氏物語(蛸)(一〇〇一〜一四頃)から「ゆかをばゆづり聞え給ひて、御几帳引きへだて、おほとこもる」を引いている。

③ 堂で勤業・座禅などのために座する台座。本来、②と同じ座床で法隆寺夢殿の行信僧都像の台床などが残るが、やがて礼盤に限定されるようになった。用例として、源氏物語(椎本)(一〇〇一〜一四頃)から「おはしましし方あけさせ給へれば、塵いたう積もりて、仏のみぞ花の飾りおとろへず、行い給ひけりと見ゆる御床ゆかなど、取りやりてかき払ひたり」を引いている。

④ 般に臥す所。臥所。「とこ」との混同による。用例として、方丈記(一二二年)から、東のきはにわらびのほどろをしきてよるのゆかとす」を引いている。

⑤ 人形浄瑠璃・歌舞伎で、太夫と三味線が演奏する席。

⑥ 夏期、京都の四条河原町一帯に出す涼床すずみどの通称。

こうしてみると、「ゆか」の字義は、建築内で、土間に対して一段、高くつくされた広がりを目指す。平安時代には仏堂(鎌倉時代の禅宗を除く)や住宅建築では、板敷きであった。一段、高くつくられた場所という点では「とこ」と似ているが、「ゆか」には、「とこ」のように、「ねどこ」の意味はなかった。実際、「ゆか」には、仏堂で勤業・座禅などのために座する台座の意味もあった。また、「ゆか」には室内の坐臥具の意味もあった。この点では「とこ」と似通う部分もあるが、「ゆか」は土間床・板敷床ともに用いる貴人用の坐臥具で、木製で脚のある低い台を指した。一方の「とこ」には脚がなく、敷物などを置き重ねてその上に臥すものであった。さらに、「とこ」との混同から、

一般に臥す所を指すようになった。用例として、方丈記（二二二年）を上げており、鎌倉初期にはこうした混同がすでに起こっていたことが分かる。京都の涼床すずまどの通称が「ゆか」というのも、混同といえは混同である。なお、上述した雨月物語（二七七六）の如く、混同は「とこ」の側にも起こった。

このように、「ゆか」には本来、「ねどこ」の字義がなかったため、本稿では「ゆか」を取り上げなかった。なお、「ゆか」には土間床・板敷床ともに用いる貴人用の坐臥具で、木製で脚のある低い台を指したとあるが、これは外来の座具である「床子」を指すものと思われる。本稿ではこれを外来の「床子」として扱った。

「ゆか」と「とこ」は、このように一部で混同が起きたものの、現代日本語では、「とこ」と「ゆか」は混同されることなく、使い分けられている。なお、「とこ」には上述の如く、多数の熟語があるが、「ゆか」には意外なことに一つもない。「ゆか」は一般的すぎて、熟語が生まれることもなかったであろう。この違いは極めて対照的であるが、それだけ「とこ」と「ゆか」には、根本的な字義の違いが存在していたことを物語っている。

2 「みまし」（御席・御座）・「おまし」（御座）・「ござ」（御座）

「みまし」（御座）・「おまし」（御座）・「ござ」（御座）は、具体的な座具や寝具のみならず、神や天皇などがある場所を意味する尊敬語で、古代の日本語において特異な意味合いがある。そこで具体的な座具とは別立てにして、ここでやや詳しく掘り下げてみたい。

（1）敬語の「み」「お」「い」

具体的な分析に入る前に、日本語における敬語の「み」「お」「ご」を整理しておきたい。いずれも漢字は「御」

を当てているが、語源は全く異なり、「み」と「お」はやまとことば、「こ」は漢語である。

「み」は、上代から存在する接頭語で事物、即ち体言に冠して尊敬の意を表した。例をあげれば、みかど（御門・帝）・みやこ（御屋敷・都）・みゆき（御行き・御幸）・みまし（御席・御座）・みまし（汝）〔御座の意、みまし「汝」なむ〕の尊敬語）・みこし（御輿・神輿）・みかげ（御影）などがある。このうち、みや（宮）・みき（御酒・神酒）・みさき（岬）などは一語化したものである。

「お」は、上代に用いられた尊敬の接頭語「おほみ」が転じて「おほん」になり、そこから「おん」に、さらには「お」になったものである。「おん」の方が文語、「お」の方が口語という使い分けが行われていたようである。「お」は、主として、中世以降になって盛んに用いられるようになった語である。もともとは体言について尊敬の意を表したが、近世以降は用言につけてその動作や状態の主体に対して尊敬を表すようになった。「み」よりも「お」の接頭語がついた熟語が圧倒的に多いのは、こうした言語的、歴史的背景による。「み」がありながら、「お」にとつて代わられたのも、「お」の汎用性の広さが受け入れられたからであろう。なお、平安中期は「おまし」「おまへ」「おもと」「おもの」など、マ行音を音頭とする語に限って「お」の付いた例が見られるが、これは接頭語「おほ」の転じたものであるとする説がある。（注16）

では、「おん」や「お」を生んだ「おほみ」（大御）はどういう語であったかという点、尊敬の意を表す「おほ」（大）と、「み」（御）を重ねた語で、「み」（御）を単独で用いるよりも強い尊敬の表現となる。例えば、古事記（雄略記）にみえる「おほみあぐら」（大御具床）がある。つまり、敬語の接頭語には、「み」の他に、「おほ」（大）の系統があったことになる。

「おほ」（大）は『古語大辞典』によると、名詞に冠し、次のような字義がある。

- ① 形が大きいこと〔おほそら（大空）・おほうみ（大海）など〕、
- ② 量がおびただしいこと〔おほあめ（大雨）・おほかぜ（大風）など〕、
- ③ 偉大で特別に尊ぶべきものを表す〔おほまえ（大前）・おほあらし（大殯）・おほうち（大内）・おほには（大庭）・おほにえ（大贄）・おほみやすんどころ（大御息所）〔先帝の御息所、または天皇の母宮〕など〕。
- ④ 同種の中で独特な意味を持つもの〔おほしお（大潮）・おほつごもり（大晦日）など〕。
- ⑤ 偉大なものを褒める意を添える〔おほきみ（大君）・おほやまと（大倭）・おほへど（大江戸）など〕。
- ⑥ 近世になると、幕府に関する事物であることを示す〔おおおく（大奥）・おおごしょ（大御所）・おおばんやく（大番役）など〕。なお、形容詞「おほきい」は中世末ごろから見られる。

一方、「こ」は漢語の「御」を音読みしたもので、「御座」「御幸」「御所」などがある。実際、「お」が主としてやまとことばに冠するのに対し、「こ」は漢語に冠する。例えば、「おさけ」（お酒）と「ごしゅ」（ご酒）の如く、この規則は現代日本語にも引き継がれている。ちなみに「さけ」の例でいうと、古くからある「み」を冠したのが「みき」（神酒）である。一語化しているため、これにさらに「お」をつけたのが「おみき」（御神酒・大御酒）である。敬語を重ねる類似の例としては「おみあし」（御御足）がある。

なお、「み」も当然、やまとことばにしか冠しない。では、「み几帳」（御几帳）はその例に漏れるではないかと思われようが、「几帳」は和製漢語であるので、当時の人にとって「み」をつけることに抵抗はなかったと思われる。「みちよう」（御帳）も例外といえる。「帳」は漢語であり、やまとことばは「とばり」であるからだ。しかし「みとばり」とは言わず、「みちよう」と読んだのは、「御ちよう」ではなく「み帳」と表記することからも、「み几帳」

から派生したと考えれば説明がつこう。

ちなみに、「み」と「ご」の重なり合いの例でいうと「みゆき」がある。この「みゆき」も「御幸」と漢語表記することもある。しかし、本来は「御行き^{みゆ}き」で、「みゆき」が上代からの言い方であったが、漢語の語彙である「御幸^{ごこう}」が入ってきてから、「御幸」と漢訳するようになったのであろう。但し、漢語の「御幸」は天子が外出することを意味するが、日本語では古くは上皇（天皇讓位後の敬称）・法皇・女院が外出する意味で使うこともあったが、現在では天皇のおでましを意味する。「みゆき」は「行幸」とも漢字表記するが、これも漢語の「行幸^{ぎょうこう}」が入ってきたのを受容したのであろう。整理すると、「みゆき」がやまとことばで、「御幸^{ごこう}」「行幸^{ぎょうこう}」は漢語の外来語である。

以上を整理すると、以下のような関係になろう。

上代 平安中期 中世 近世

A み(御)

例 みかど(御門・帝)・みやこ(御屋処・都)・みゆき(御行き・御幸)・みまし(御座)・みき(御酒)・みこし(御輿・神輿)・みかけ(御影)〔みや(宮)・みき(御酒・神酒)などは一語化したもの〕

B おほ(大)

例 おおぞら(大空)・おおあめ(大雨)・おほまえ(御前)・おおきみ(大君)・おほしお(大潮)・おほつごもり(大晦日)・おほやけ(大宅・公)・おほやけし(公し)〔近世以降、幕府に関する事物を示す。おおおく(大奥)・おおごしょ(大御所)など〕

B-1 おほ↓お

例 おまし・おまへ・おもと・おもの（平安時代のマ行を音頭とする語）

C おほ（大）+み（御）↓おほみ（大御）（一層の強い敬意）

例 おほみあぐら（大御具床（古事記）

おほみ（大御）↓おほん（大御）↓おん（御）↓お（御）

C-1 おほん（大御）例 おほんこと（大御事）・おほんとき（大御時）

C-2 おん（文語）例 おんかた（御方）・おんみ（御身）・おんざうし（御曹司）

C-3 お（口語）例 おかた（御方）・おかみ（御上）・おとど（大殿・大臣）

D 御（ゴ・ギヨウ）

例 御座^{ゴザ} 御幸^{ゴコウ} 御所^{ゴシヨ}

以上、敬語の接頭語である「み」「お」「ご」を整理したところで、これらの接頭語のついた座具、及び寝所に
いて詳しく見ていきたい。

(2) 「み」の系統

みまし（御座）―『古語大辞典』によると、神や貴人の座る所や、そこに敷く敷物を敬つていう語。用例として、
日本書紀「顕宗即位前紀・訓」から「十二月に百官^{も、の、つかさ}大に会^{つど}へり。皇太子億計、天皇の璽^{しるし}を取りて、天皇の坐^{まゝ}に
置きて」を、日本書紀「天智紀九年・訓」から、「山の御井の傍らに諸神^{かみたち}の座^{ミマシ}を敷^かぎ、幣帛^{ひてくら}を班^みつ」を引いている。

「みまし」は「おまし」よりも古い語と思われる。日本書紀は七二〇年に成立したものであるが、「坐」や「座」を「ミマシ」と訓をつけたのがいつの時代かが正確に分からない。とはいえ、「おまし」が普及する平安時代中期であれば、「オマシ」と訓をつけたはずであるので、それ以前と考えてよかろう。

みやすみどころ（御休所）——『古語大辞典』によると、貴人の休息所、寝所。この「みやすみどころ」から転じたのが、「みやすんどころ」及び「みやすどころ」（御息所）である。但し、意味は、貴人の寝所から転じて、天皇や東宮などの妻を間接的にさす語となった。「みやすんどころ」は、「女御」や「更衣」といった漢語に対するやまとことばと考えられる。^{（注19）}なお、「みやすどころ」は大和物語（九四七〜九五七頃）にも出てくるので、元となる「みやすみどころ」は少なくとも一〇世紀中葉以前から使われていたことになる。

それにしても、寝所を表す「みやすみどころ」から転じた「みやすんどころ」「みやすどころ」が天皇や東宮の妻という字義に変化したというのも興味深い。日本語化した「女御」は天子のそば近くで仕えた女官で、皇后、中宮の次ぎの位。一方、漢語の「女御」は周代の女官で、天子の食事とか寝所につきそった。この点では、漢語も日本語化した「女御」も同じである。従って、「女御」に相当するやまとことばが「みやすどころ」であるとすることは説得力がある。また、日本語化した「更衣」は「ころもがえ」の意のほか、平安時代の御宮女官の称の一つで、地位は女御に次いだ。初めはもっぱら天皇の衣替えの御用を務めたが、のち（仁明天皇の御代）天皇の御寝に奉仕するようになり、地位も上がった。対して、漢語の「更衣」は着物を着替える意のほか、休息したり、着替える部屋を指した。しかしながら、漢語の「更衣」には官職名の字義はなく、日本語化した「更衣」は日本独自の用法であった。

なお、源氏物語の場合、「みやすみどころ」と並んで「みやすどころ」及び「みやすどころ」も出てくるが、頻度は「みやすどころ」が圧倒的に多い。また、「更衣」の頻度はさほど多くないが、「女御」と「みやすどころ」の頻度はほぼ同程度である。『源氏物語』（新日本古典文学大系・岩波書店）の注釈によると、源氏物語では、桐壺更衣、六条御息所、明石女御、一条御息所（朱雀院の更衣）、玉鬘の姫君のみが「みやす（ん）所」（御息所）と呼ばれる、としており、限定して使われている。対して、「女御」は漢語で書かれ、個人を特定する場合もあれば、位を表す一般名詞として使われることもあり、紫式部は両者を使い分けて書いている。

（3）「お」の系統

おまし（御座）——『古語大辞典』によると、動詞「ます」の名詞形に「お」を冠したものである。

①「おましどころ」に同じ。用例として、源氏物語（帚木）（二〇〇一〜一四頃）から「動もなくて奥なるおましに入り給ひぬ」を引いている。

② 貴人が座席に敷く敷物。易林本節用（二五九七）に「席、筵オマシ」とある。用例として、大和物語（二四〇）（九五一頃）から「例のおましどころにはあらで廂におまし敷きて」を引いている。

③ 座敷の女房詞。

おましどころ（御座所）——『古語大辞典』によると、貴人のおられる所。「おまし」とも。用例として、源氏物語（帚木）（二〇〇一〜一四頃）から「月いとあかうさし入りてはかなき度のおまし所は奥まで隅なし」を引いている。

おはしどころ（御座所）——『古語大辞典』によると、貴人の居所。いらっしゃる所。「おはしましどころ」とも。用例として、宇津保物語（楼上・上）（七九〇頃）から「西の楼には高侍のおとどのおはしどころ、東の楼にはいぬ

宮のおはしところなり」を引いている。

おはしましどころ（御座所）——『古語大辞典』によると、貴人の居所。いらっしやる所。おはしどころ（御座所）よりも一層、尊敬した言い方。用例として、河内本源氏物語（玉鬘）（二〇〇一〜一四頃）から「こちらの年ごろ、夢にてもをはしましどころ（青表紙本では「おはしまさむ所」）を見むと大願をたつれど」と引いている。また『栄花物語（見果てぬ夢）』（一〇二八〜九二頃）から「いと、御里住心安くひたぶるにおぼされて、東院の北なる所に おはしましどころ造らせ給ふ」を引いている。

以上をまとめると、「おましどころ」「おはしどころ」「おはしましどころ」は基本的に同じ意味で、貴人のいらっしやる所、となる。漢訳もいずれも「御座所」と同じである。「おまし」（御座）は、「おましどころ」（御座所）を略したものであると同時に、特に貴人の座席に敷く敷物を指すこともある。易林本節用（一五九七）に「席、筵オマシ」と訓読しているのがそれである。このことから、「おまし」がやまとことばであり、「御座」は漢訳であることが分かる。

「おはしどころ」と「おはしましどころ」は基本的な意味は同じであるが、「おはしましどころ」の方がより尊敬した言い方である。では、「おましどころ」との関係はどうであろうか。これを理解するためには、語根である「あり」「をり」「おはす」「おはします」「おまし」の関係を見ていく必要がある。

「あり」「をり」（「いらっしやる」「お出かけになる」の意）が基本の語で、「おはす」はこの尊敬語という関係であるが、「おはす」よりさらに強い尊敬の語が「おはします」となる。一方、「おまし」は動詞「ます」の名詞形に「お」を冠したものである。動詞の「ます」（坐・座）も「あり」「をり」の尊敬語である。「おはします」がよ

り尊敬の度合いが高いのは、敬語を二つ重ねているからであろう。これらの関係を図式化すると以下のようになる。

「あり」(有)「をり」(居)∧「おはす」(御座)∧「おはします」(御座)

「あり」(有)「をり」(居)∧「ます」(坐・座)の名詞形「まし」∧「おまし」(御座・席・筵)

「あり」(有)「をり」(居)∧「います」(在・坐)

こうしてみると、最終形の「おはします」と名詞の「おまし」は、元を辿れば、「あり」(有)「をり」(居)の尊敬語ということになる。「います」(在・坐)の場合も同じである。

「おはす」と「おはします」「おまし」は語源も尊敬の度合いも異なるが、漢訳すると「御座」に統一されたのは、漢語では、これらのニュアンスの違いをさせなかったからである。この点ではやまとことばには、敬語も含めて、さまざまなニュアンスの語彙が存在したことになる。それにしても、「あり」(有)「をり」(居)が敬語になると、「おはす」(御座)「います」(在・坐)と、当てる漢語が「坐」「座」へと大きく変わってくるのが興味深い。「御座」はこの「座」に敬意を表す「御」をつけただけである。

(4) 「い」の系統

「いぢぢ」(御座)を見ていく前に、まず、敬語の「い」(御)と、「ぢ」(座)の字義を見ていきたい。「い」(御)、「ぢ」(座)、「ぢぢ」(御座)のいずれも古語辞典に掲載されているが、漢語とは明記されていない。それだけ早くから日本語化したということであるが、漢語の「御」を「ゴ」と読むのは呉音、「ギョ」と読むのは漢音であり、このこ

とからも「ご」が漢語であることは間違いないだろう。

ご(御)は、『古語大辞典』によると、以下の字義がある。

① 御前ごぜんの略。婦人の呼称の下に、助詞「の」を介して接続し、敬意を表す語、初めは高貴な身分の女性に用いたが次第にごく軽い気持ちで一般に用いられるようになった。……さま。……のおかた。土佐日記に「淡路の御ごの歌に劣れり」とある。

② 接頭語。漢語の名詞に冠して、そのものを敬意をもって丁重にいう。「御座ゴザ」「御幸ゴコウ」など。中世には、下に一字もしくは二字の漢字を置いて「あり」が接続し、その漢語を語幹とするサ変動詞に尊敬の意を添える用い方が多い。宇治拾遺物語(五・八)に「御対面あらむずるぞ」とある。時に、天草平家本(二)にある如く、「きよ(＝清盛)さらにごもちいなされなんだ」とか、バレット写本に「重きとがのごゆるされを蒙るべき」とある如く、やまとことばに冠することもある。

③ 接尾語。人物を表す体言に付けて、敬意を表す。……さま。太平記(十二)に「是はなう母御何くへ行き給ふぞ」とある。

中世において、「ご」が時にやまとことばに冠することもあったというのは、それだけ「ご」が日本語化していったことの反映であろう。しかし、現代日本語でもやまとことばに「ご」をつける例は見当たらず、基本的に漢語につく。これは「ご」が漢語の音であるから、ある意味、当然のことである。

ざ(座) — 『古語大辞典』によると、以下の字義がある。

- ① すわる所。席。用例として、源氏物語(若菜上)(一〇〇一〜一四頃)から「上達部の座、いとかるがろしや。こなたにこそ」を引いている。
- ② 板敷きの間の坐る所に設ける敷物。円座など。用例として、源氏物語(乙女)(一〇〇一〜一四頃)から「さをひきて立ちたうびなんなど、おどしいふもいとをかし」を引いている。
- ③ 仏像などを据える台になるもの。台座。用例として更級日記(二〇六〇頃)から「れんげのさの、土をあがりたる高さ三四尺、仏の御丈六尺ばかりにて」を引いている。
- ④ 金具の下に添えて装飾とするもの。座金。
- ⑤ 仏事、神事を修行したり、説教を聴聞したりする場所。
- ⑥ 人の集まる場所。会席。
- ⑦ 連歌・俳諧の百韻などを興行する席。
- ⑧ 中世、寺社の支配下にあつて、商工業または芸能を営むもので、同一職業・同一商品を扱う者がつくった職業集団。
- ⑨ 歌舞伎・浄瑠璃などの興行の組織。

このように、「ざ」の本来の字義は、人がすわる所を指していて、必ずしも座具ではない。しかし、転じて板敷きの坐る所に設ける、円座などの敷物を指す場合もある。また、仏事や神事において仏像の台座や、修行をする場所の意味にもなった。ギルドとしての座の字義が加わるのは中世以降のことであるが、これはおそらく漢語からの影響と思われる。

「^{ござ}御座・莫座・臥坐」―「^ご」は、『古語大辞典』によると、尊敬の接頭語で、以下の字義がある。

① 座席の尊敬語。貴人の座もしくは相手の座席に対して敬意を表している。天皇には「ぎよぎ」という。例として、源氏物語（桐壺）（二〇〇一―一四頃）に、「冠者の御座、引入の大臣の御座、御前にあり」のほか、謡曲・摂待（室町初期）から「この上は御座を直され候へ」を、蒙求抄（四）（一六三八）から、「さあらば御座へはまいるまいほどに」を引いている。

② 貴人の座席の畳の上に重ねて敷く畳。藪みで編み、縁へりのついたものを二枚重ねて敷く例となった。天皇のものは纏うづ網縁へりである。上畳あけたみ、御座畳ござだたみとも。例として、枕草子（二七七）（二〇世紀終）から、「ことさらに御さといふ畳のさまにて、高麗なごいとよらなり」を引いている。

③ ②の形のもので、縁のついているものになったもの。畳表で床のついていないもの、即ち、藪みを緯ぬきに木綿糸を経ぬきにして編んだ筵せんで、縁のついているものをいう。いろいろな場合の敷物に用いるほか、夏、褥しとねの上に敷いて用いる。また、骰子賭博さいごらとぼくに用い、盆莫座という。和漢三才図会（三三）（二七二序）に「単席うわしき俗に云う御座也。莞みを以て織成す。文い氈したみの如き者を浮世御座と名づく。暑月褥しとねの上にこれを舖く。故に上舖うわしきと称す。江州舟木より出る者を上と為し、備前瀬の尾これに次ぐ。丹波を下と為す」と見える。また、和漢音釈書言字考節用集（二七一七）に「莞筵せん ゴザ（字彙、莞は灯心草）、臥坐ご同（俚民の寢席）」とみえる。松屋筆記（五三）（二八一―八四五）に「御座ござむしろ、今の世ゴザともウスベリともいふは御狭筵ござせんの筵を省てゴザとのみいへる名也」と見える。

④ 座を占めていることに対する尊敬語。例として、謡曲・大原御幸（一四世紀末―五世紀初）から「今は御留守の由候。暫くこの所に御座ござをなされ、御帰りを御待ちあらうずるにて候」を引いている。

⑤ 御座船ござふねの略。例として、西鶴大矢数（四）（一六八一）から「乗物の御座が出て行難波より」を引いている。

「ござしよ（御座所）」は、『古語大辞典』によると、貴人のすわる所。「おましどころ」「ござどころ」とも。太平記（七）に「汝等到大塔宮の御座所を尋問ん為に召取つる也」とある。「ござどころ（御座所）」は「ござしよ」に同じ。歌謡・国栖（室町時代中期）に「天子の御座所ござどころいこそ、紫雲は立つと申せ」とある。

さて、こうしてみると、「おましどころ」「おはしどころ」「おはしましどころ」はやまとことばである事が確認できる。「おましどころ」の略と思われる「おまし」も同様である。ここで問題になるのは、「おまし」の漢訳としての「御座」と、「ござ」（御座）との関係である。なぜ同じ漢字なのに、「おまし」と「ござ」という読み方が存在するのか。この答えは簡単で、「おまし」がやまとことば、言い換えれば「御座」の訓読、「ござ」が漢語の「御座」の音読、という関係である。おそらく、先に「おはしどころ」を「御座所」と漢訳し、後にこの「御座」を「ござ」と音読みするようになったのであろう。なので、音読みしようと、基本的な字義に大きな変化はない。

ちなみに、源氏物語にて「御座」と漢字表記しているのは、「桐壺」「若菜上」「匂宮」の三つだけである。このうち「若菜上」では「おまし」と「御座」が一文の中に混在している。なお、「藤裏葉」に「ざ」が出てくるが、岩波書店版の翻刻では「御座」としているが、ここではカウントしないことにする。対して、仮名書きの「おまし」は四五回ほど、「おましどころ」と「おはしどころ」も加えると、合わせて五四回も出てくる。このことから、少なくとも源氏物語が書かれた時代では、圧倒的に「おまし」が使われ、「御座」はかろうじて使われ始めた時期、ということが言えそうである。

3 総称としての「しきもの」

やまとことばには、座具の総称としての「しきもの」がある。先にこれを見ておきたい。

しきもの（敷物）は、『古語大辞典』によると、人がすわるために敷く、布、むしろなどの総称。類聚名義抄（二〇八一頃）に「筵ムシロシキ物」とある。用例として源氏物語（絵合）（二〇〇一〜二〇一四頃）から「左は紫檀したむの箱はにすはわうの花足（は）（けぞく）、敷物（しきもの）には紫地むらさきぢの唐からの錦にしきを引ひいている。

「絵合」の「しきもの」は華足の下に敷いたものであるが、源氏物語には、もう一回、「梅枝」にも「しきもの」が出てくる。この場合は明石の姫君が使う身の回りの物の準備の話なので、人がすわる座具と考えてよい。

しきもの（引敷物）は、『古語大辞典』によると、敷物。「ひしき」は「引き敷き」で寝るときに下に敷く物。用例として、伊勢物語（三）（一〇世紀前半）から「思いあらば葎むぐらの宿しゆくに寝もしなんひしきものには袖そでをしつつも」を、仮名草子・けしずみ（二六七七）から「または局はやくのすがむしろをも、ひしきものにして、木枕もくまくらのあかじみたるをもいとわず、そひぶしに足をさへえ伸のばさぬせばき所ところにても」を引ひいている。

4 「むしろ」「たたみ」「しとね」「あぐら」「ふすま」「ござ」「わろうだ」「ひざつき」「蒲団」

やまとことばによる座具や寝具としては、「むしろ」「たたみ」「しとね」「あぐら」「ふすま」「ござ」「わろうだ」「ひざつき」などがある。以下、それらがどのような座具で、いつ頃から使われ始めたのかを個々に見ていきたい。あわせて、当てた漢字の字義とも比較していきたい。

(1) むしろ

むしろ(筵・席・蓆・筵)は、『古語大辞典』によると、わら・竹・真菰・籐などを編んで作った敷物の総称。和名類聚抄(九三四頃)によると、「筵」は竹のむしろ、「席」は薦のむしろとある(「筵 无之路。竹蓆也。蓆 訓、同上。薦 蓆也」)。いろいろな種類があるが、形からは、広筵・長筵・小筵など、産地からは、出雲筵・信濃筵・豊島筵・琉球筵など、品質からは、管筵・綾筵・萱筵などがある。なお、寝具としては、絹に綿を入れた上筵もある。簡素な覆いや囲いにも用い、舟の帆とすることもある。日本書紀(歌謡)六一(七二〇)に「梯立の嶮しき山も我妹子と二人超ゆればやす武志呂かも」とあるほか、万葉集(二五三八)(八世紀後半)に「一人寝とこも朽ちめやも綾蓆 緒になるまでに君を相待たむ」と、堤中納言物語(よしなしごと)(十一世紀中〜十三世紀頃)に「旅の具に、むしろ・た、み・たらひ・はんざぶ貸せ」と、誹諧続猿蓑(上)(二六九八)に、「筵をしいて外の洗足」などとみえる。「むしろ」は、転じて、座席、坐る場所の意にもなった。例として、正法眼蔵(行持上)(二二三一〜二三五)に「新戒晩進のおれとしては、むしろのすゑを接するたりよいなほまれながごとし」とある。さらに転じて、会合や行事が行われる場所の意にもなった。例として、古来風体抄(上)(二一九七)から、「公宴の歌も、私の家々の歌も、そのむしろによめる程のうたは、かずのま、にもいりたるやうにぞあるべき」とある。

『週刊朝日百科・源氏物語』(一九)によると、「むしろ」(筵)は「むしろ」(葎代)からきた語で、蘭・蒲・藁・竹などで編んだ敷物一般を指す。薦も筵になるが、荒く粗末。大きさにより広筵・長筵・狭筵・細貫筵などがあり、素材の産地による出雲筵・筑紫筵・とう唐筵といった呼び名もある。最高級品は玉座に用いられる竜鬚筵で、今日の花筵(色模様を織り出した蓆)にあたる。竜鬚は細い蘭のことで、いろいろに染めて織り、青字の錦の縁をつ

ける。下敷きとする場合は、「地鋪」「敷物」「打敷」などという。

『古語大辞典』には「むしろ」の語は掲載されていないが、「むし」(苧・帔)は掲載されている。いらくさ科の苧の繊維で織った布。強靱で、湿気の吸収発散に優れ、各地の上布類、帷子などの夏衣、蚊帳などの材とする。類聚名義抄(二〇八一以後)に「帔 ウチカケギヌ、ムシ」とみえる。また、「しろ」(代)は、名詞に接し、その名詞に相当する物、その材料となる物などの意を表すとし、例として、苗代や矢代を挙げている。網代や壁代、形代、戸もこれに加えられる。従って、「むしろ」とは、もともとは「むし」に代わる物、という意であったと思われる。

『字訓』によると、「苧代」の意とする説もあるが、苧は朝鮮語と同源であったらしい。高崎正秀説のように「身代」の意であろう。古くは室内に用いたが、畳が普及してからは屋外用となった、としている。

漢語の「席」は廟中に席のある形。説文(七下)に、「藉くものなり」とあり、いわゆる祭藉で、祭祀に供薦ものを置くために敷く。後に、重席をもいい、礼記(曲礼上)に「席間、丈を函」とあって、長者との席は一丈の間をおく定めであった。

「筵」は延声。延は「乏」に従う字で、乏は変死者をいう。互は儀礼を行う場所。羨道の羨と声義が通じ、鄭は墓室へ通ずる道。礼記(楽記)に「筵席を舗き、尊俎を陳ぬ」、また儀礼(士冠礼)に「東序に筵す」とあり、鄭注に「筵は神の為に席を布くなり」、周礼(司几筵)に「筵は神を坐せしむるの席なり」とあって、起源的には羨道の祭祀のときに用いたものとみられる。筵は墓道、席は廟中に用い、ともに神事の用に供した。わが国の「むしろ」

【図17】むしろ(筵)



最高級の龍髻地鋪で、御帳台の上敷となる。原図は「類聚雜要抄指図巻」

もおそらく神事的な起源をもち、霊位を置くために用いたのであろう、としている。

後述する座具としての「あぐら」が本来、神の坐する場であったことを考えると、「むしろ」も当初は同様の使われ方をしていたものと推測される。その後、神具としての意味合いが薄れ、一般の座具として普及していったのであろう。従って、「むしろ」に「席」や「宴」の字を当てたのは、本来の字義に合致しているといえよう。

むしろの熟語としては、むしろおり（筵織）、むしろがこい（筵圍）、むしろだ（席田・筵田）、むしろど（筵戸）、むしろなおし（席直）、むしろばた（筵旗）、むしろばり（筵張）、むしろばりのくるま（筵張車）、むしろびやうぶ（筵屏風）、むしろほ（筵帆）、むしろやぶり（筵破）などがある。

このうち、「むしろばた」（筵旗）は筵を旗としたもので、竹竿などに付けて、一揆の際などに押し立てた。「むしろなおし」は老人の後妻、「むしろやぶり」は老人の好色を指す。むしろばりのくるま（筵張車）は、「張筵の車」ともいい、覆いとして、筵を張った牛車で、下賤げせんの者が用いた。枕草子（二二三）（一〇世紀終）に、雨の降らぬ日の筵張り車を「わびしげに見ゆるもの」としている。

（2）たたみ

たたみ（畳）は、『古語大辞典』によると、「たたむ」の名詞形。使用しない時は畳んでおくことから、また、幾枚も重ねて敷くことからの称などという。以下、二つの字義がある。

① 古くは敷物を総称する。薦・筵こも・筵むしろ・敷皮の類いなどの薄い敷物をいう。平安時代に入ると主として薄縁の類いを指すようになり、貴人の座所などに用いられた。古くは使用する時にのみ敷き、ふだんは収納されていることが多

かった。平安中期ごろから、畳の縁にさまざまな種類の布帛が用いられるようになり、使用者の身分、使用の場などにより区別された。縹綱縁は天皇・上皇・三宮・摂関などに、高麗縁は親王・公卿、紫縁や黄縁それ以下とする。また法会などでは、親信卿記（天禄三・八・二四）（九七二〜九七四）に「季御読経）緑端畳を鋪き王卿の座と為し、黄端の畳を鋪き出居の座とする……近年之例、僧綱は緑端と為す、凡僧は黄端を用ゐる」とみえ、紫・緑・黄などが用いられた。

大きさも固定して、六尺に三尺程度の長方形のものが標準になり、高貴な人はこれを二枚並べてその上にさらに種々の敷物を敷く。帳台も二枚である。この場合片側のみに縁を付けたものを用いる。また、標準のものに対して、半畳や長畳がある。畳に裏を付けたものも現れた。和名類聚抄（九三四頃）に「畳 太々美」とある。古事記（中）（七二二）に「管畳八重、皮畳八重、絶畳八重を波の上に敷きて其の上に下り坐しき」と、万葉集（三三八五）（八世紀後半）に「からくに韓国の虎といふ神を生け取りに 八頭取り持ち来 その皮を 多多弥に刺し」と、枕草子（一本・二二）（一〇世紀終）に「たたみは高麗ばし。また、黄なる地のはし」とある。また、堤中納言物語（よなしごと）（一一世紀中〜一三世紀頃）に「旅の具に、莖・た・み・たらひ・はんざぶ貸せ」と見える。

② 稲藁などで厚みを出した敷物。すでに平安時代から現行の厚畳に近いものはあったが、それが一般普通のものになったのは、鎌倉時代以降と考えられる。源氏物語絵巻などによれば、大きさも規格化し、住居の床一面に敷き詰めるようになる。近世の畳は、乾燥させてたたいたわらを重ねて、台とか床とか呼ばれるものを形成し、その上に蘭草で編んだ表を縫い付け、いろいろの色・材質の布のへりを付ける。へりのないものもあった。和漢三才図会（三三）（一七二二）によると、畳表は備後産を上品とし、備前・備中産がこれに次ぎ、近江産、丹波産と続いた。産地や使用地域により大きさが異なり、京畳は長さ六尺三寸、幅三尺一寸五分、江戸近辺は長さ五尺八寸、

幅二尺九寸などで、転宅時はそれを持って移り、田舎では上層の者以外はむしろ、古俵などを常用し、田舎では明治以降までもその風は残っていた。大乘院寺社雑事記(寛正二・二二二)(一四五〇～一五二七)に、「諸庄御畳用途の事。高麗(御座面廷裏)。一帖、神殿庄。二帖、楊本庄」と見える。八帖花伝書(五)(室町末期)に「た、みの台の上にて序破と舞、台を降りて破急と舞う」とあるほか、曠野(員外)(一六八九)に「菊萩の庭に畳を引きづりて」とある。

『週刊朝日百科・源氏物語』(一九)によると、莖を何枚か重ねて綴じた「薄べり」、または、藁を束ねて糸で締めた今日の畳をいう。ともに藁を編んだ畳表で表を覆い、縁をつける。縁は長手方向につけ、身分によって材質や文様、色調などに差があつた。錦地には、天皇・上皇用の最高級品となる縹縹縁(赤地に多色の縦縞を描き、その間に菱の文様を織り出す)。親王や大臣用の大紋の高麗縁(白地に黒糸で文様を織り出す)、公卿用の小紋の高麗縁がある。絹地には、殿上人や地下人(昇殿の勅許を得ていない下級官人)用の紫縁がある。布地には、六位以下と楽人用の黄縁がある。昼御座(清涼殿の天皇の昼間の座所)では、畳を二帖並べた上に褥を置いた。宴会時は横に並べて円座を置いた。寝床ともなり、使用しない時は隅に寄せられた。

『字訓』によると、漢語の「畳」はもと疊に作り、晶と宜に従う。晶は多数の玉、宜は俎の上に多くの肉をのせた形。ともに神に供するものである。漢語においては重なる意であるが、わが国では「たたむ」、手で折る意に用いる。これを敷物の意に用いるのは、わが国の用法である、としている。

【図18】は御帳台の敷物を上から見た図。縹縹縁の畳二帖並べて地鋪とし、中央に中敷と表莖が重ねて敷かれて

いる（中敷は見えない）。四隅にあるのが土居で、柱穴に三個の銚金具が見える。この図では右が南にあたる。

【図19】は、畳を運んでいるところ。「春日権現記絵」（一三〇九）に見える図で、一四世紀初めにはすでにやや厚みのある現在の物に近い畳が作られていたことが分かる。『角川 新編 古語辞典』も同じ図を引いており、これによると「たたみ」の第二の字義として、中古、主として薄縁うすべりの類いをいう。室内の床は板張りで、必要に応じてこれを敷いた、とある。この図もその目的で運んでいるのであろう。

(3) あぐら

あぐら（呉床・胡床・胡坐）は、『古語大辞典』によると、足（あし）座（くら）の意で、高く作られた座席をいう。「あぐら」とも。類聚名義抄（二〇八二頃）に「胡床 アグラ」とある。あぐらには、時代によって四つの字義がある。

① 席にしたり、寝所に用いたりする台座。例として、古事記（下）（七二二）に、「雄略天皇）吉野に幸行し時…、其処に大御呉床をたてて、其呉床に坐して、御琴を弾きて、其の嬢子に舞ひせしめ給ひき。…御歌を作る、其歌に曰く、阿具良韋の神の御手もち弾く琴に舞する女

【図19】 たたみ（畳）

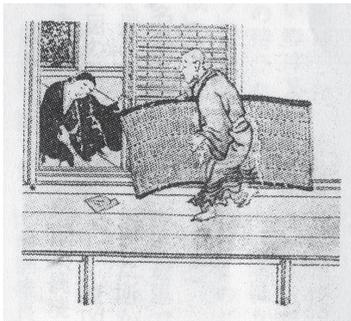
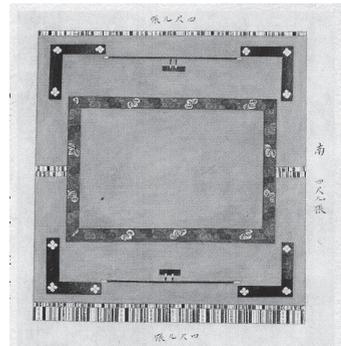


図19 たたみ（畳）春日権現験記絵『古語大辞典』より

【図18】 たたみ（畳）とむしろ（筵）



『週刊朝日百科・源氏物語』（一九）より

な常世にもがも…即ち阿岐豆野に幸まして御獵の時、天皇呉床に坐して…やすみしい我大君の猪待つと阿具良あぐらにいまし」と見える。

② 一種の腰掛け。官人、楽人などが用いる。(注2) 和名類聚抄(九三四頃)に「胡床 風俗通に云ふ。靈帝胡服を好み、

京師皆胡床阿具良を作る」と見えるほか、住吉大社神代記(平安初期～中期頃)に「胡床 四脚〔平文、金銅金物并〕色皮敷物」と見える。また、西宮記(二〇世紀中頃)に、「相撲を見る際に) 諸衛胡床に就き、王卿以下外の弁幄に就く」と、源氏物語(胡蝶)(二〇〇一～一四頃)に、「わざと平張りなどもうつされず、おまへに渡れる廊を楽屋のさまにして、仮にあくらどもを召したり」と、さらに栄花物語(根合)(二〇二八～九二頃)に、「(即位式に際して内部が)玉の冠してあくらどもの上に居並みたる、唐絵の心地して」と、新鬼神論(鬼神新論)(一八〇六)に、「雷電の形容を観むとするには、人三人にて其事を為し、一人は床机あぐらなどに坐て、後箱の上なる筒に付けたる糸をもち」などと見える。

③ 高く組み上げた足場。例として、竹取物語(九世紀末～十世紀初)から「まめならぬ男どもを、あぐらを結びあげてうかがはせむに」を引いている。

④ 両脚を前に組むすわり方。そのようにすわることを「あぐらをかく」といい、また「じよらくむ」ともいう。例として、浄瑠璃・神靈矢口渡(四)(一七七〇)に「親分は内にかと揚口あがりぐちから大あぐら」を、筆の御霊(後・二)(一八五二)から、「居さまは足くみたるなり。足を胡床に居る時の居さまとして、後にはあぐらとも、あぐらかくともいへど、正しく装束まはては、必ずかくのみ居る事なり」を引いている。

「あぐら」はこのように、本来は上代において、神や貴族が坐る高い台であり、座具にもなれば、寝台にもなった。

また、高い足場という意味もあるが、座具としての「あぐら」のポイントは、神や身分の高い人間しか使うことが許されなかったものである、ということにある。このことから、「あぐら」の上では、足組して坐っていたものと思われる。「あぐら」は、万葉仮名では古くは「阿娑羅」、後に「阿具良」「阿久良」と表記されることが多かった。表音文字から脱し、漢字表記する際に「足座」とすればまだよかったのであるが、古事記では「(大御) 呉床」と漢訳した。^(注22) なお、「大御」は先述した如く、尊敬の接頭語である「おほ」(大)と「み」(御)を組み合わせたもので、より尊敬の意がよくなる接頭語である。当時すでに「胡床」(折りたたみ式の腰掛け)の存在は知られていたと思うが、敢えて「呉床」としたのは、折りたたみ式の「胡床」ではなく、「広く中国で用いられている床」という意味を出したかったのであろう。しかし、歌の部分は漢訳すると読めなくなるので、「阿具良韋」(足組みして坐る)と表音文字である万葉仮名で表記した。

ところが、その後、中国の座具である「胡床」の実物が入ってきた際に、これを「あぐら」と訓読してしまったため、やまとことばとしての「あぐら」と、中国の座具としての「胡床」が同じ「あぐら」で呼ばれることになってしまった。単に座具の違いだけでなく、やまとことばの「あぐら」は足組みして坐るのに対し、「胡床」は腰掛けて坐るものであり、坐法まで違うのでややこしいことになった。

その上、室町末から近世初にかけて、足を組んで楽に坐る意味で、「あぐらをかく」という表現が生まれた。古代の「あぐらゐ」の「ゐ」が略されて「あぐら」になったものと推測されるが、座具からあぐらを組む坐法へと字義が変化していく過程で、従来の「胡床」を「胡座」(胡坐)と修正したため、さらにややこしいことになった。これは「胡床」から派生した、いわば和製漢語であり、「あぐらをかく」坐り方と、腰かけて坐る「胡床」とは全く関係がない。実際、「あぐら」は「安愚楽鍋」のように、「安愚楽」と漢字表記したり、「寛坐」と書いて「あぐら」と読ませ

たりしている。「寛坐」の場合は、正座が規範となっていく過程と反比例して、楽な坐りかたとして生まれた漢訳の例であろう。なお、後述するように、江戸時代には、陣中で用いる折りたたみ式の簡便な座具を「床几」と称した。

(4) しとね(茵・褥)

しとね(茵・褥)は、『古語大辞典』によると、席に坐ったり臥したりするときに敷く敷物の一種。座具としての敷物には、主として「茵」の字を当てる。畳の上に置いたり、椅子や床子の上に載せて用いる。一人用は方四尺くらい、二人以上には八、九尺四方まであって、ともに正方形。また、藁席のものとは織物があつて、前者は主として官庁で用いられた。小町席を表として布の裏をつけ、中に数枚の薦を重ね入れ、四周は布帛の縁をつけたが、黄絹縁は五位以上、紺布縁は六位以下主典以上、史生のもは縁なしであつた。織製の表に真綿を入れ、唐綾の縁を五寸幅につけた。後世の座布団は、「茵」の系統。和名類聚抄(九三四頃)に「茵之止禰茵褥、又虎豹の皮を以て之を為る」と、大和物語(二七三(九五二頃)に「簾の内よりしとねさし出でたり」と、源氏物語(末摘花)(二〇〇一〜一四頃)に「御しとねうち置き(周囲を)ひきつくるふを」とある。

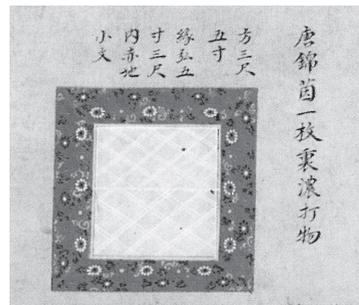
臥具としての「しとね」にはおもに「褥」の字を当てる。上席うへじひに同じ。長方形で、絹や栲たか、また毛の織物で真綿を入れて額縁をつけた。敷布団。座具の「しとね」が、もっぱら「座布団」にとつて代わられたのに応じ、近世期、「しとね」の語はこの寝具のほうを指すようになる。〔室町時代の国語辞典である〕下学集(二四四四)に「茵シトネ、褥シトネ」と見える。

『週刊朝日百科・源氏物語』(一九)によると、床や畳に敷き、坐つたり、物を置いたりする敷物。今日の座蒲団

や敷布団に当たたる。蓆を重ねて蘭蕙を表にしてものと、中に綿を入れた織物のものがあつた。ともに縁をつけ、畳と同じく身分により差があつた。織物の襖は、宮中や上級貴族用で、中でも中国あんなん・安南とうやんの東京錦きん（白地に赤く鳥や蝶などの文様を織り出す）の褥などは最高のものとされた。源氏物語では、光源氏や薫が坐つた褥に残る移り香を愛めでる女房たちの様子が語られている。

【図20】の原図は「類聚雑要抄指図巻」。絵の右に「唐錦茵一枚裏濃打物」と記されている。

【図20】しとね（褥）



『週刊朝日百科・源氏物語』（一九）より

(5) ふすま（衾・被）

ふすま（衾・被）は、『古語大辞典』によると、次の二義がある。

- ① 寝具の一つで、寝るときや病床にあるとき、体の上から覆い掛けるもの。もと昼間身につけていた衣を脱いで覆いとしていたことに始まるので、後世まで領袖えりそでなどの衣の形を持つものが多い。しかし平安末には、雅亮装束抄（一）（平安時代末期）「御ふすまは紅の打ちたるにてくびれなし。長さ八尺、又八幅はちひろか五幅のものなり。くびの方には紅のねり糸を太らかによけて二筋ならべて、横さまに三針にさしをぬふなり。それにくびとしるべし」と見える如く、領えりのない、今の掛け蒲団に近いものもあつた。冬用には綿入れがあり、材質も麻衾あさひすま、栲衾たかひすまから、山槐やまわい（久寿・三三・三五）（二一五一〜二一九四）に見える如く「御衾、紅打長さ九尺、弘さ九幅（面小葵、裏平絹）」のように、婚礼用の豪華なものまでさまざまである。またその用途から、身につけていた衣を脱いで、体を横たえ

たときに上に掛けているものを「ふすま」と呼ぶこともある。禄ろくに用いられることも多い。和名類聚抄(九三四頃)に「衾 布須万 大被也」とあるほか、下学集(一四四四)に「被 フスマ、衾(二字同じ)」とある。源氏物語(柏木)(二〇〇一〜一四頃)に「病床の柏木は」白き衣しろぎどものなつかしうなよ、かなるをあまたかさねて、ふすまひきかけてふす給へり」とある。

② 神事に従事する人が、腰の周りにまとう布。腰衾こしふすま。また湯殿ゆどのを奉仕する人などが腰に着ける布。西宮記(四)(一〇世紀中頃)に、「延喜一五年二月廿日神祇官に於て祭事を行ふ。……外記、縫殿寮を召て腰衾を進ら令む……」とある。

『週刊朝日百科・源氏物語』(一九)によると、掛け蒲団の役目をする寝具。長方形のものと、後世の丹前の形と似た、衿や袖のある直垂衾ひたれふすまがあった。前者は首の方に太く燃よった紅の練り糸を二筋並べ、三針で刺して目印とした。直垂衾は、国宝源氏物語絵巻の柏木二・御法の病床みりのに臥す柏木紫の上に例が見られる。男性官人は、宮中の宿直とどの際には、直垂衾とどを持参した。寝ることを「衾参るふすままゐ」とも言い、婚姻時には、妻の母が二人を衾で覆う「衾覆ふすまおほいの儀」があった。源氏物語の葵巻では、葵の上を亡くした光源氏が「旧ふるき枕まくら故ふるき衾、誰と共にか」と漢詩の一句を手すさびに書いている。

【図24】原図は「北野天神縁起」。広口の袖が見え、直垂衾であることがわかる。

【図21】ふすま（衾）



『週刊朝日百科・源氏物語』(一九)より

【図22】わろうだ



『国語大辞典』より

(6) わらうだ

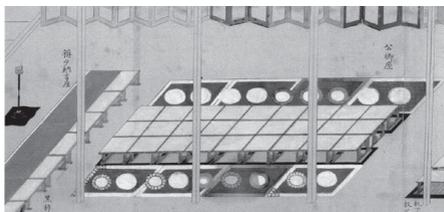
わらうだ(蒲団・円座)は、『古語大辞典』には記載がなく、『国語大辞典』によると、藁、藁、蒲、菅などを渦巻状に編んだ、円形の敷物。円座。わらざ。わらだ。天理本金剛般若経集験記平安初期点(八五〇頃)に「却き蒲団ワラタに倚りゐて彌よ励む」とある。また、源氏物語(若菜上)(二〇〇一〜一四頃)に「つきづきの殿上人はすのこにわらうだめして」とある。このほか、伊勢物語(八七段)(二〇世紀前半)にも「布引きの滝」の形容として「さる滝の上に、わらうだの大ききして、さしいでたる石あり」とある。

『週刊朝日百科・源氏物語』(一九)によると、「えんざ」ともいう。藁・菅・薦・藁などを平たく渦巻に丸く編んだ敷物。天皇用は九巻き、一般は七巻きにする。材質により、「管円座」「薦円座」などという。厚さによって、「厚円座」「薄円座」があり、前者は大臣用となる。儀式でも使用し、新年の大饗の行事などでは、大納言用は縁を紫地の錦、中納言用は縁を青字の錦というように色や材質で差をつけた。

おそらく、「わらうだ」の「わら」は「わら」(藁)と関係がありそうである。外来語である「蒲団」は円形の座具であり、これに対して平安初期に「ワラフタ」と読んでいることから、「円座」は漢語であり、「わらふだ」がやまとことばであろう。

実際、『大漢和辞典』にも「圓座」は掲載されており、藁や藁などで丸く平たく編んだ敷物と説明し、「わらうだ」

【図 24】 錦の円座が並べられた儀式



【図 23】 簡素な円座



『週刊朝日百科・源氏物語』(一九)より

のほか、「圓草褥」としている。後者の典拠として、平安時代の漢和辞典である和名類聚抄(調度部坐臥具、圓座)(九三二〜九三八)に「孫愔曰、蓐、圓草褥也」と見えるとされている。一方、「圓坐」と書くと、多くの人が円形に坐ることを意味し、晋書「阮咸伝」(六四六〜六四八)に見える「以大盆盛酒、圓坐相向」を引いている。なお、「日本では」「圓座」には「圓坐」の意味もあり、一話一語補(遺三)(二七七五〜一八三二)から「うさぎ数十匹つらなり、圓座して、皆立ちあがり」を引いている。

【図22】原図は「一遍聖絵」。

【図23】原図は「春日権現験記絵」。

【図24】原図は「類聚雜要抄指図卷」。永久四(一一一六)年正月二三日、東三条殿の寢殿で催された大饗の宴の室礼が示されている。

(7) ひざつき

ひざつき(軾・膝突)は、『古語大辞典』によると、公事で地面の上にひざまずくとき、膝が汚れないようにする小半帖畳の敷物。薦または畳で作る。「小筵」、「半帖」ともいう。小右記(長徳・二・八・九)(九九六)に「称唯して膝突に着いて位記を給ふ」とある。古今著聞集(三)(二二五四)に「左近将曹大名久季、まづひざつきをしきめてしたりけり」とある。前田本・色葉字類抄(一五六五)に「軾ヒサツキ、膝突 同(俗用也)」とある。徒然草(一〇二)(二二三一頃)に「まづ、軾を召さるべくや候ふらん」とある。なお、徒然草(一〇三)には他に「近衛殿着陣し給ひける時ひざつきを忘れて」とある。近世になると、「ひざつき」は、芸事などの師匠に入門時に挨拶として持参する礼物を指すようになった。

(8) ふとん

ふとん(蒲團・布團)は、『古語大辞典』によると、唐音。敷物と寝具の二つの意味がある。

- ① 漢語。僧侶が座禪、または跪拜するときに用いる敷物。直径約一尺の円形に作り、中に蒲の穂などを入れる。圓座のことで、「わろうだ」もしくは「えんざ」と読んだ。のち、一般に綿を入れた方形のものを言い、座蒲團、また略して蒲團と称する。坐蒲。下学集(二四四四)に「蒲團フトン」と、正法眼蔵(座禪儀)(二二三一)一三三五)に「坐禪のとき袈裟をかくべし。蒲團をしよくべし」と見える。また、湯山千句抄(上)(一五〇〇)から、「蒲團に坐して眠りておる人の軀が驚いて睡がさむるぞ」、及び誹諧・猿蓑(一)(二六九二)に、「からじりの蒲團ばかりや冬の旅」を引いている。

- ② 綿や絹の布地の間に綿などを詰めて保温をよくした寝具。掛け蒲團と敷き蒲團がある。掛け蒲團に当たるものは古くは衾と呼ばれ、平安から鎌倉期には直垂と称する襟や袖のあるものが用いられ、やがて、夜着や蒲團へと変わっていった。また、敷き蒲團に当たるものは、古くは上席と呼ばれ、やがて褥が用いられ、褥をもって寝具の呼び名となった。江戸期に入り、綿織物や木綿の生産が発展し、寝具に綿が用いられるようになって、夜着や蒲團が普及した。志不可起(二七二八跋)に「ふとんと云うは誤也。是は元褥也。茵とも書、貴賤共に夜敷て寝具也」とある。誹諧・談林十百韻(一六七五)に「すゝりなくには袖のぬれもの／敷たえのふとんの上の恋の道」とあるほか、誹諧・炭俵(上)(二六九四)に「ふとん丸げてものおもひ居る」とある。

なお、近世には「ふとんおに(蒲團鬼)」という遊戯があった。鬼になった者の体を蒲團で巻いて帯でくくり、鬼は逃げる者を追いかけて体に触る。触られた者を交替して鬼となる。絵本大人遊(下)(二七八九―一八〇二)に「蒲

団鬼 蒲団にて身み中ちゆうをくるく巻、手共に帯にてしかとく、り、他ひとに障りに行なり。さわられたる人、また替わりおにに成なり。ふとんおに必こけるものなり。自起みづかる事出来ず。故に、人來りて後より起す。此おこしに来る人にさわる也」とある。

『大漢和字典』によると、「蒲」は「がま」のことで、がまで編んだむしろの意もある。僧侶が用いる座具としての「蒲團」は、中唐の詩人、顧況（七二七～八一五）の「宿湖邊山寺詩」に「蒲團僧定風過席」と見えることから、唐代にはすでに存在していたことになる。

(9) まとめ

「しきもの・むしろ・たたみ・しとね・ふすま・おはしどころ・おまし・おましどころ・ざ・ござ・わろうだ・ひざつき・ふとん」を整理すると、以下のようになる。

しきもの（敷物）

人が坐るために敷く、布、むしろなどの総称。「ひしきもの」（引敷物）も同義。

むしろ（筵・席・蓆・筵）

① わら・竹・真菰まこも・籐とうなどで編んだ敷物の総称。形状は広筵・長筵・小筵など多様。寝具としては、上筵うはむしろ（表筵つはむしろ）。
簡素な覆いや囲い・舟の帆。

② 転じて、座席、臥すところ・床。

たたみ(畳)

「たたむ」の名詞形で、使用しない時は畳んでおくことから、またむしろを幾枚も重ねて敷くことからの称などという。古くは薄い敷物の総称、平安時代に入ると貴人の座所などに用いられた。平安時代から厚畳に近い物はあつたが、鎌倉時代以降それが一般化。

しとね(茵・褥) 使い方

形状 近世

(茵) (座具) 畳・椅子・床子の上に敷く。 正方形↑「座布団」に取って代わられる。

(褥) (臥具) 敷蒲団「上席」とも言う。 長方形↓寝具の意味へ特化。

おまし・おましどころ・おはしどころ (御座・御座所) —やまとことば。いらつしやる所。「おまし」はその座具を意味することも。

ざ(座) —漢語の音読

すわる所。席。転じて、板敷きの間のすわる所に設ける円座などの敷物。仏像などの台座。

ぎよび(御座・莫座・臥坐) —漢語の音読。「ご」は尊敬の接頭語。天皇用は「ぎよび」という。

①座席の尊敬語。貴人もしくは相手の座席に対して敬意を表している。

②貴人の座席の畳の上に重ねて敷く畳。藁で編み、縁のついたものを二枚重ねる。「上畳」「御座畳」とも言う。

後に一般化。「単席」「上舗」「御狭(筵)」とも。

わろうだ(蒲団・円座)

藁、藁、蒲、菅などを渦巻状に編んだ円形の敷物。わらざ。わらだ。

ふすま (衾・被)

① 具の一つで、寝るとき、体の上から覆い掛けるもの。もと昼間身につけていた衣を脱いで覆いとしていたため、後世まで領袖えりそでなどの衣の形を持つものが多かったが、平安末には今の掛け蒲団に近いものもあった。

② 神事に従事する人が、腰の周りにまとう布。腰衾こしふすま。

ひざつき (軾・膝突)

公事で地面の上にひざまずくとき、膝が汚れないようにする小半帖畳の敷物。薦または畳で作る。「小筵」「半帖」ともいう。

ふとん (蒲團・布團) — 唐音

① 漢語。僧侶が座禅、または跪拜するとき用いる敷物。円形。後に、綿を入れた方形のものを「座蒲団」(略して「蒲団」)、「坐蒲ザッパ」と言うようになる。

② 綿や絹の布地の間に綿などを詰めて保温をよくした寝具。

掛け蒲団 — 古くは「衾ふすま」、平安から鎌倉期は「直垂ひたなれ」と称する襟や袖のあるもの。やがて、夜着よぎや蒲団へと変化。

敷き蒲団 — 古くは「上席うわじり」、やがて「褥しじふ」が用いられ、褥をもつて寝具の呼び名へ。江戸期に寝具に綿が用いられるようになり夜着や蒲団が普及。

以上をまとめると、最も古く八世紀の文献に見える語のうち、寝床としては「とこ」が、座具としては「あぐら」があり、敷物の総称としては「むしろ」があった。この「むしろ」を何枚も重ねたのが「たたみ」であり、平安時

代は薄い敷物の総称であったが、鎌倉時代以降、厚みのあるものが普通となっていた。次いで古い語が「ひざつき」である。また、「しとね」も一〇世紀の文献に見える。こちらは座具、寝具の両方の意があったが、一七世紀になって寝具に特化していく。一〇世紀には、掛け蒲団に相当する「ふすま」(衾)が文献に見える。当初は襟袖がある衣の形をしていたが、一二世紀末には現在の掛け蒲団に近い形のものも現れた。

一一世紀の文献に見えるようになった「ざ」、及び「ござ」は、漢語の「座」及び「御座」の音読である。「ざ」はやまとことばというよりは、外来語と思われる。源氏物語でも、「ざ」と書かれたり漢語の「座」と書かれたりしている。「ざ」は人のすわる所を指したが、転じて坐る座具を意味する場合もあった。「ござ」の「ご」は「ご」の尊敬語であったが、やがて尊敬の意が薄らいでいった。

一五世紀になって外来語である「ふとん」(蒲団)が僧侶らによって使われるようになる。当初は座具であり、これから「座蒲団・座布団」が生まれる。その後、一七世紀になって「ふとん」は寝具へと特化していき、「しとね」や「ふすま」に取って代わるようになった。

これらの語彙を、初出と思われる文献の年代順に整理したのが以下の図表である。座具や寝具としての「とこ」のほか、「おまし」も加えた。但し、「みやすみどころ」「みやすんどころ」は、座具ではないので除外している。

「とこ・しきもの・むしろ・たたみ・あぐら・しとね・ふすま・おはしどころ・おまし・おましどころ・ざ・ござ・わろうだ・ひざつき・ふとん」の初出

古代	中世	近世
奈良～平安時代	鎌倉時代～室町時代	江戸時代～

8世紀

とこ(床)【寝床として】古事記(712)・万葉集(8世紀後半)・源氏物語(1001～14頃)・日葡辞典(1603～04)
 とこしき(床敷・床褥)日本書紀(720)

むしろ(筵・席・蓆・蓐)【座具として】日本書紀(720)・万葉集(8世紀後半)・和名類聚抄(934頃)・堤中納言物語(11世紀中～13世紀頃)・古来風体抄(1197)・誹諧・続猿蓑(1698)・歌舞伎・大塔宮曠鏡(1723初演)

たたみ(畳)古事記(712)・万葉集(8世紀後半)・枕草子(10世紀終)・堤中納言物語(11世紀中～13世紀頃)
 あぐら(阿具良・吳床・胡床・胡坐)古事記(712)

おはしどころ(御座所)宇津保物語(790頃)

9世紀

わろうだ(円座)天理本金剛般若経集験記平安初期点(850頃)・源氏物語(1001～14頃)・伊勢物語(10世紀前半)

10世紀

ひしきもの(引敷物)(敷物の総称)伊勢物語(10世紀前半)

ひざつき(軾・膝突)小右記(長徳二)(996)・古今著聞集(三)(1254)

むしろばりのくるま(筵張車)枕草子(10世紀終)・栄花物語(1028～92頃)・今昔物語(1120頃)

しとね(茵)【座具として】和名類聚抄(934頃)・大和物語(951頃)・源氏物語(1001～14頃)・類聚雑要抄(1146頃)

ふすま(衾・被)和名類聚抄(934頃)・源氏物語(1001～14頃)・雅亮装束抄(平安時代末期)・山槐記(1151～1194)・下学集(1444)

こしふすま(腰衾)西宮記(10世紀中頃)

11世紀

しきもの(敷物)(敷物の総称)源氏物語(1001～14頃)

おまし(御座)・おましどころ(御座所)・源氏物語(1001～14頃)

ざ(座)【すわる場所・座具】源氏物語(1001～14頃)・更級日記(1060頃)

ござ(御座・奠座・臥坐)【座具として】源氏物語(1001～14頃)・謡曲・撰待(室町初期)・蒙求抄(1638)

ござ(御座・奠座・臥坐)【座量みとして】枕草子(10世紀終)・和漢三才図会(1712序)・和漢音釈書言字考節用集(1717)・松屋筆記(1818～45)

13世紀

むしろ(筵・席・蓆・蓐)【座席として】正法眼蔵(1231～1235)・古今著聞集(1254)

むしろ(筵・席・蓆・蓐)【寝る床として】愚管抄(1220)・日葡辞典(1603～04)

14世紀

ござ(御座・奠座・臥坐)【座を占めることの尊敬語として】謡曲・大原御幸(14世紀末～15世紀初)

15世紀

しとね(褥)【座具として】下学集(1444)

ふとん(蒲團・布團)【座具として】下学集(1444)・正法眼蔵(1231～35)・湯山千句抄(1500)・誹諧・猿蓑(1691)

17世紀

ふとん(蒲團・布團)【座具として】誹諧・談林十百韻(1675)・誹諧・炭俵(1694)・志不可起(1728跋)

ふとんばり(蒲団張)誹諧・江戸蛇之峠(1679)・西鶴十三回忌追善俳諧集・こゝろ葉(1706)・明君文武蹟(1718)

むしろなおし(席直)信長公記(江戸初期)

むしろびやうぶ(筵屏風)誹諧・当世男(1676)

むしろばた（筵旗）奥州信夫郡伊達郡之御百姓衆一揆之次第（1699）
 むしろがこい（筵園）誹諧・猿蓑（1691）・北野諸般録（1729）
 むしろど（筵戸）西鶴名残の友（1699）
 ごぞ（御座・莫座・臥坐）【御座船として】西鶴大矢数（1681）
 あぐらをかく 虎明本狂言・察化（室町末～近世初）

18世紀

とこ（床）【床机や棧敷として】浄瑠璃曾根崎心中（1703）
 むしろおり（筵織）雜俳集・口よせ草（1736）・南総里見八犬伝（1814～42）
 むしろやぶり（筵破）忠臣蔵（1748 初演）
 むしろは（筵帆）和漢船用集（1766）・誹諧・己巳／四時行（1809）
 むしろばり（筵張）怪談名香富貴玉（1773）
 ふとんおに（蒲団鬼）絵本大人遊（1789～1801）

※太字は現在も使われている語

こうしてみると、これらの語彙のうち、「とこ」「むしろ」「たたみ」「あぐら」などが古くからある語のようで、日本書紀や古事記に見える。「むしろ」の場合、字義からしても、これに「席」や「筵」の漢字を当てたのは的確であった。但し、漢語の「席」には、簡素な覆いや囲いに用いたり、舟の帆とすることはなかったと思われる、これが相違点でもある。「むしろ」は、その後も「むしろばりのくるま」（筵張車）として一〇世紀の文献に見えるほか、座席や寝る床として一三世紀の文献にも登場するし、近世に入ってから新たな熟語が作り続けられ、現在でも使われ続けている。

一段高くなった寢床としての「とこ」に「床」の字を当てたのは的外れではないが、本来の字義としては土間と木造の違いがあった。このズレのせいで、二〇〇年後に木製の座具である「床子」が入ってきた際に、同じ「床」の字が混在することとなった。但し、後者を「シヨウジ」と音読みすることにより、大きな混乱を生じることはなかった。また、座具としての「胡床」を「あぐら」と訓読みしたこの問題点は上述したとおりである。

「たたみ」は「たたむ」の名詞形で、漢語の「畳」の字を当てたが、漢語の「畳」は重なる意であるのに対し、やまとことばの「たたむ」は、積み重なる意のほか、手で折る意もある。例えば、源氏物語「東屋」に「屏風一枚たたまれたるより」と見える。「畳」の漢字を敷物の意に用いるのは

日本だけの用法である。つまり、中国には「畳」という座具は存在しない。

次いで古いことばが「わろうだ」（蒲團・円座）で、九世紀には存在していたようで、源氏物語や伊勢物語にも登場する。

次いで古いことばが「ひざつき」と「しとね」で、一〇世紀に文献に登場する。「しとね」は当初は座具と寝具の両方の意があり、座具の場合は「茵」、寝具の場合は「褥」の字が当てられた。その後、「しとね」は、一五世紀になって寝具の意味に特化していき、「褥」の字のみが当てられるようになった。

一〇世紀には、掛け蒲団に相当する「ふすま」（衾・被）が文献に登場する。当初は衣を脱いで体にかけていたので襟袖があったが、平安末には、現在の掛け蒲団の形状に近いものもあった。

八世紀から「おはしどころ」（御座所）という語があったが、一一世紀には「おまし」（御座）・「おましどころ」という語が登場する。こちらはやまとことばで、同じ漢字表記であるが、「ござ」（御座・真座・臥坐）と読む語は、「座」に尊敬の接頭語である「御」をつけたもので、漢語の音読みである。

『大漢和辞典』によると、漢語の「御座」（ぎよざ）は座の敬称で、君主のいましどころ、とある。典拠としてあげている漢書（戻太子據伝）に「壞御座掘池」とあるほか、後漢書（隱逸、嚴光伝）に「明日太子奏、客星犯御座甚急」と見える。これを見る限り、漢語の「御座」には、日本語の敷物としての「ござ」の意味はなく、広く場所を指している。

一方、漢語の「御坐」には、天子の坐る座席、また、その傍らの意味がある。典拠として後漢書（周拳伝）に見える「欲帝置章御坐、以為規誠」を引いている。「御坐」には、他に座席の傍らに侍る、侍坐する意味もあり、典拠として韓非子をあげている。後漢書の場合も、日本語の敷物としての「ござ」の意味というよりは、広く坐る場

所を指している。

「ゴ」は呉音で、「ギョ」は漢音なので、「ゴザ」と読む方が古く、後に「ギョザ」と読むようになったと思われる。その際、音の違いを使つて、敷物としての「ゴザ」と、天皇が坐る座を意味する「ギョザ」との使い分けが行われたものと推測される。但し、外来語としての座の尊敬語である「御座」から、やがて敷物としての「ゴザ」が派生的に生まれたのか、あるいは座の尊敬語として「御座」という熟語を日本人が造つたのかはよくわからない。後者だとすると、「御座」は和製漢語ということになるが、おそらくその可能性は低そうである。ただ、外来語とすると、漢語本来の「御座」と、日本語でいう「御座」にはやや字義の開きが認められる。この場合は、外来語が日本に入ってきてからその字義が大きく変化した、ということであろう。

「御座」には当初から座具のほか、敷畳みとしての意味もあつたが、一四世紀になると、座を占めることの尊敬語としての意も加わつた。その後、尊敬の意が薄れ、現在では「ござ」は「むしろ」とほぼ同義で使っている。現代日本語では、「ござ」は薄い畳表、「むしろ」はもう少し荒い作りで厚みがあるイメージである。

一五世紀になつて、「ふとん」(蒲團・布團)が登場する。「蒲團」は外来語で、「ふとん」は唐音である。本来は座具、とりわけ僧侶が座禅をする時などに用いる円形の敷物であつたが、後に、綿を入れた方形のものを「座蒲團」と呼ぶようになる。これが座具としての「しとね」に取つて替わつていく。「ふとん」(蒲團)は一七世紀になると、寝具としての使われ方もするようになる。敷き蒲團に相当するものを、古くは「上席」と呼び、やがて「褥」が用いられるようになる。掛け蒲團に相当するものを、古くは「衾」と呼び、平安から鎌倉期は「直垂」と呼んでいた。近世に入ると、綿の普及により、これらに替わつて「夜着」や「外来語」であつた「蒲團」へと変化していった。

5 「榻」「胡床」「床子」「墩」「兀子」「倚子」

続いて、「榻」「胡床」「床子」「墩」「兀子」「倚子」など中国からもたらされた座具を見ていきたい。当然ながら、これらはみな漢語であり、日本語にとっては外来語である。「榻」の訓は「しじ」であるが、やまとことばの「しじ」は座具というよりは牛車の軛くびきを置く台に特化していること、座具としても平座ではなく、その上に腰をかけて坐ったことから、どうやら現物の「榻」が日本にもたらされてから、作られた語のようにも思える。こうした理由から、「しじ」はこちらで「榻」として扱う。「胡床」については、先述の「あぐら」のところで、その漢訳として紹介しているが、ここでは外来の座具として改めて簡単に触れたい。また、厳密には、「蒲団」もここで扱うべきであるが、現実的には日本語の一部になっているうえ、「しとね」や「ふすま」との関係を示すべく、前節で扱った。このほか、和製漢語と思われる「草整・草墩」（そうとん）もここで扱う。

(1) しじ (榻)

「しじ」はやまとことばであると思われるが、残された文献上では、漢語の「榻」の方が早く登場する。『国語大辞典』では、「しじ (榻)」の第一の字義として、牛車ぎしやに付属する道具の名とし、牛を取り放した時、軛くびきの軛を支え、または乗り降りの踏み台とするもの。形は机に似て、甲板を一枚板または簀子板として鷺足さぎあしをつけ、漆を塗り、金具を施す。黄金具は大任用、散らし金物（赤銅）は納言、大将用、黒金物（鉄）は納言以下が用いる。ただし、四位以下は使用が許されなかった。用例として、新撰字鏡（八九八〜九〇一頃）から「榻志持也」を、蜻蛉日記（九七四頃）から「川のかたに車むかへ、しぢたてさせて」を引いている。第二の字義として、腰掛け、ねだいをあげ、用例として続日本紀（慶雲元（七〇四）年正月丁亥）から「天皇御大極殿受朝。五位已上始座始設榻焉」を引いている。

『古語大辞典』も、「しぢ」の字義を、牛車ぎゅうしゃの牛を外したときに、轆なぐさの軛くひきを載せておく台、とした上で、「漢語の」「榻は本来、こしかけ（腰掛）やねだい（寝台）の意で、その用例として、管家文章（二）（九〇〇）に、「金花落つる処、争ひて榻を移す」と見えるほか、西大寺資財流記帳（二）（七八〇）に、「居白木榻一基（敷布一条、長四尺六寸）……居榻一基（長九尺一寸、敷布一条、長一尺一条）」とあるとしている。しかしながら、その意味は次第に「床床子」が受け持ち、「榻」は軛くひきの台を意味するように限定されていったとし、用例として和名類聚抄（九三四頃）から「榻之知 牀也」を、下学集（一四四四）にも、「榻シヂ（人座或は日本の俗車の具と為す也）」を、枕草子（二七八）（二〇世紀終）から「二条の大路にしぢにかけて物見る車のやうに立て並べたる、いとおかし」を引いている。

さて、これらの記述から何を読み取れるか。両字典とも「しぢ」の第一の字義を牛車ぎゅうしゃに付属する道具名としているが、本来の字義は腰掛けや寝台であった。残された文献上、最も古く「榻」が登場するのは続日本紀（七〇四）、西大寺資財流記帳（七八〇）、管家文章（二）（九〇〇）で、いずれも漢語で書かれている。その字義も座具や臥具である。対して、やまとことばの「しぢ」が最初に出てくるのは、新撰字鏡（八九八〜九〇一頃）に見える「榻志持也」が最初で、次いで和名類聚抄（九三四頃）に「榻之知牀也」と見える。時代が下って、下学集（二四四四）にも、「榻シヂ（人座或は日本の俗車の具と為す也）」とある。この場合の「しぢ」というやまとことばは、果たしてどちらの意味であったのか、という疑問が起こる。

仮名文字で牛車ぎゅうしゃに付属する道具名としての字義で「しぢ」と出てくるのは、古い順にいうと、蜻蛉日記（九七四頃）に「川のかたに車くるまむかへ、しぢたてさせて」とある。また、源氏物語（二〇〇一〜一四頃）に二回登場する。一回目は「葵」の帖で、有名な「車争い」で六条御息所が乗った車の「しぢ」が壊された場面である。即ち、「しぢなど

もみな押し折られて、すずろなる車の筒にうちかけたれば」とある。もう一回は、「蜻蛉」の帖に、「御供の人の目もあれば、上り給はで、御車のしちを召して、妻戸の前にぞる給ひけるも見ぐるしければ」とある。また、枕草子（二七八）（一〇世紀終）に「二条の大路にしちにかけて物見る車のやうに立て並べたる、いとおかし」と、宇治拾遺物語（二二二頃）には、「牛をかきはらずして、しちに軛くひきを置きて」と見える。

漢語の座臥具としての「榻」が記載されたのが七〇四年、牛車の道具としての「しち」が登場するのが九七四年、この間二七〇年もの開きがある。この間に字義の変化も生まれた。一方、漢和辞典で「榻」を「しち」と訓読したのは、新撰字鏡（八九八〜九〇一頃）が最初で「榻志持也」と、続く和名類聚抄（九三四頃）から「榻之知牀也」としている。この「志持」や「之知」とは一体、どんなものであったのか。今となつては知る由もないが、やまとことばとして、相当する座臥具があったものと推測するのが順当であろう。座臥具から牛車の道具へという変化を促したのは、同時代の中国ではすでに、床や榻に代わつて、胡床が広く使われるようになっていたことも関係している。両者の字義を区別するため、蜻蛉日記以降は、「しち」と仮名書きしている。源氏物語の原文も、いずれも仮名文字で「しち」と書かれ、「榻」という漢語は翻刻の際につけられたようである。もともと、「榻」から「しち」に変化していつても、漢文で書く場合は「しち」の意味で「榻」を使った。牛車の「しち」を持って車に従う役目の者を「御榻役」（しちの役）といった。『国語大辞典』によると、吾妻鏡（貞永元年三月三日）（二二三）に「被寄先日到著之毛車。当座被差御榻役」とある。

なぜこういう議論をするかという点、やまとことばと思われる「しち」ではあるが、「榻」がもたらされる前から本当に日本に存在していたものなのか、という疑問が残るからである。漢語の「榻」が使われる以前の文献に「し

ち」がでてこない。極論すれば、先に外来の「榻」が入ってきて、当初はこれを漢字音で「トウ」と読んでいたが、やがて字義も牛車の道具に変化していった結果、「しぢ」という音を当てたのではないか、という可能性も考えられる。「しぢ」となっても、源氏物語にあるように、その上に腰掛けることは可能であった。なぜなら「榻」はもともと座臥具であったからである。さらに、「榻」から「しぢ」となっても、「しぢ」は牛車のもてる貴族、しかも四位以下は使用が許されなかったとあり、「しぢ」はかなりの高級品で、権威の象徴であった。これも「しぢ」のもとの物が舶来品であったと考える傍証になろう。

もし、漢語の「榻」が入る以前から、やまとことばに「しぢ」という座臥具があったとしても、平座が普通であった時代に、はたして日本人が、腰掛けて坐る座臥具を作っていただろうか、という疑問が残る。「おほみあぐら」（大御呉床）の如く大きな台であれば、その上で平座していた可能性はある。したがって、もし「しぢ」が「榻」が入る前から存在していたとしたら、腰掛けて坐るものではなかった、と推測される。

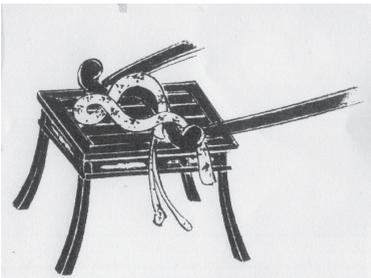
なお、「しぢ」に関しては、「しぢの端書^{はしがき}」という逸話がある。『国語大辞典』によると、昔、女が、言い寄る男の誠意を確かめるために、百夜通って榻に寝たら会おうといったので、男は九九夜まで毎夜来て、榻の端に証拠を書き付けておいたが、百夜目に支障があつて行くことが出来ず、思いを遂げえなかった、という伝説である。男の恋の熱烈さ、また、恋愛の思うようにならないことの喩えとされる。散木奇歌集（恋下）（一一二八頃）に「しるしあれや竹のまろねを数ふれば百夜はふしぬしぢのはしがき」とある。また、仮名草子・薄雪物語（二六三三）に「心中はみたらし河ほどに御入り候へども、しぢのつまがきにて候へば、此人やらん、日に千度おもひゆやるとはよもしらじ通ふ心の物をいはねば」とある。もっとも、『国語大辞典』は「語誌」にて、古今和歌集（恋五）の「暁のしぎ

のはねがき百はがき君が来ぬ夜は我ぞ数かく（「読み人知らず」）の「しぎのはねがき」を、「しちのはしがき」とした本によって作られた伝説であると「袖中抄」にあるとし、古今集の有力伝本に「しちのはしがき」の本文はなく、歌意も「鴨の羽がき」が自然で、「榻」説はこじつけか、としている。ただ、この伝説は平安鎌倉期、歌人に広く知られ、先載和歌集（恋二・七七八）（一一八八）に「思ひきやしじかきつめてももよ百夜も同じまろねせんとは」と詠まれた、としている。

確かに、この場合の「しち」が牛車ぎゅうしゃに付属する道具の意味だとすると、狭い台に横たわるのは苦痛が伴うが、本来の大きな寝台の意味なら、何も「しち」である必要はない。どちらの字義にしても、ここで「しち」が出てくるのは不自然であり、私もこじつけ説に与したい。

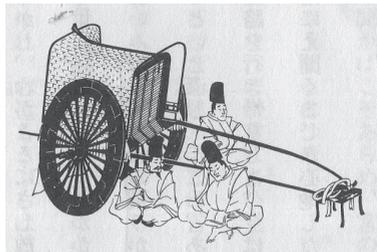
中国で「榻」が用いられるようになるのは、三世紀前半の漢末のことであり、日本とのタイムラグはかなりある。文献上は八世紀には日本に「榻」の現物がもたらされたようであるが、それまでに五〇〇年ほどの開きがある。上述の如く、日本でも当初は座具や寝具として用いられたと推測されるが、平安時代になると、車の轆ながえを載せる台として意味が特化していき、その後、文献にも座具として登場することはなくなった。従って、「しち」

【図26】しちの図



「信貴山縁起」
『国語大辞典』より

【図25】車ながえの轆くびきをしちに載せた状態



「年中行事絵巻」
小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』6
より

は本来の「榻」と比べ、かなり小さくなっているが、装飾は凝ったものもあった。「しぢ」が車に乗る際の踏み台としても使われたということであるが、中国においても臥床に上がる際の踏み台として使われており、この点は同じである。

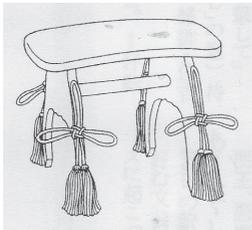
(2) 胡床

胡床（こしょう）は、「あぐら」のところで書いたように、やまとことばの「あぐら」に、「呉床」「胡床」「胡坐」という漢字を当てたため、本来の意味である高い台と、外来の座具である「胡床」とが混同する結果となってしまった。古事記に見える「呉床」は「中国の床」という意で具体的な座具ではない。同様に、後に当てられた「胡坐」は、足を組んで坐る坐法であり、これも座具ではない。唯一、「胡床」だけが具体的な座具を意味する。

『週刊朝日百科・源氏物語』（一九）によると、「胡床」は「あぐら」ともいい、江戸時代以降は「床几」と呼ぶ。折りたたみ式の携行用の椅子。脚を左右X字形に組み、尻受けに皮や布を張る。舞楽の際に、楽屋で楽人たちが使用したことが、源氏物語（胡蝶）にみえる、としている。その上で、胡床として、**【図27】**に示した図を掲載している。

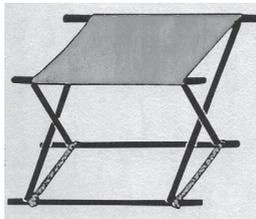
『角川新版古語辞典』の「あぐら」の項目でも、胡床として、**【図27】**と同じような図を挙げている。一方、『国語大辞典』では、胡床として、**【図28】**の図

【図28】 胡床



『国語大辞典』より

【図27】 胡床



『週刊朝日百科・源氏物語』（一九）より

を挙げている。これは私の理解する胡床ではないが、典拠を示していないので、日本で作られた座具の図の可能性もある。いずれにせよ、これを「胡床」と呼んだとしても、この上に平座することは考えられず、やはり腰掛けて坐つたものと思われる。

外来の「胡床」がもたらされた当初は、先に引いたように、類聚和名抄（九三四頃）に「胡床 風俗通に云ふ。靈帝胡服を好み、京師皆胡床阿具良を作る」とか、住吉大社神代記（平安初期～中期頃）に「胡床 四脚〔平文、金銅金物并〕色皮敷物」とか、西宮記（一〇世紀中頃）に「相撲を見る際に）諸衛胡床に就き、王卿以下外の弁幄に就く」という如く、漢語の「胡床」をそのまま使っている。類聚和名抄では「胡床」を「あぐら」と読ませているが、「こしゅう」と音で読むこともあったものと推測される。実際、「床子」は「しょうじ」と音で読んでいる。ただ、ややこしいのは、すでに平安時代から、源氏物語（一〇〇一～一四頃）に「わざと平張りなどもうつされず、おまへに渡れる廊を楽屋のさまにして、仮にあくらどもを召したり」とか、栄花物語（一〇二八～九二頃）に「（即位式に際して内部が）玉の冠してあくらどもの上に居並みたる、唐絵の心地して」とある如く、明らかに外来の「胡床」を指して「あぐら」と書いている例がある。従って、実際にどんな座具なのかは、文脈で判断するしかない。おそらく、座具としての「胡床」が普及していくに従って、「あぐら」というと「胡床」を指すことが多くなっていったと推測される。

なお、江戸時代以降は「床几しよふ」と呼ばれたということであるが、先に引用したように、新鬼神論（鬼神新論）（一八〇六）に「雷電の形容を観むとするには、人三人にて其事を為し、一人は床机あぐらなどに坐て、後箱の上なる筒に付けたる糸をもち」とあり、江戸時代には床机と書いていたことが確認できる。しかしここでも「あぐら」と読ませており、江戸時代でも両方の読み方があったようである。

(3) 床子

床子(しょうじ)は、『国語大辞典』によると、方形の板の四隅に脚をつけた、机に似た腰掛け。そうじ、とある。管家後集(九〇三頃)に「題竹床子」と見えるほか、古今著聞集(二二五四)に「長居は庭に床子に尻かけて候ける」とある。

『週刊朝日百科・源氏物語』(一九)によると、床子は、今日の縁台のような方形の坐るための台。四本の脚の上に、細い板を横に透かして置いた。大きさ、製法、材料、用法などから多様な種類があった。このうち「大床子」は天皇用で、清涼殿の母屋に、二脚並べて、その上に菅の円座すげを敷いた。源氏物語(桐壺)に見える「大床子の御膳おもの」は、清涼殿の大床子に着座してとる天皇の正式の食事をいう。

さて、この「床子」であるが、『大漢和辞典』には、寄りかかる台、とだけ説明があり出典が示されていない。「く子」というのは口語的な表現なので、「床子」という語が中国の古典に書き記されることがなかったのであろう。

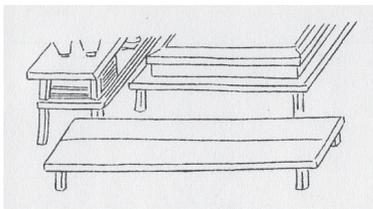
【図29】原図は「年中行事絵巻」。

【図30】天皇用で2脚並べ円座が置かれている。原図は「公事録附図」。

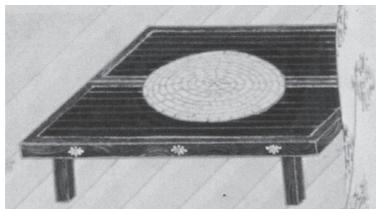
(4) 兀子

兀子(ごっし)は、『国語大辞典』によると、腰掛けの一種。長方形の板の四辺に脚をつけたもの。朝儀列席の官人が使用。ごし。延喜式(三八)(九二七)に「僧綱座

【図29】床子



【図30】大床子



『週刊朝日百科・源氏物語』(一九)より

『国語大辞典』より

位兀子。問答者座亦各立兀子」と見える。

『週刊朝日百科・源氏物語』（一九）によると、宮中で使用される方形の四本の脚からなる腰掛け。宰相（参議）以上の位で使用されるので、新任の際に新調されたが、親王なども使用した。平安時代の儀式書である西宮記に、東宮元服において加冠役（冠を載せる役）が紫兀子、理髪役（髪を整える役）が黄兀子に坐すとあり、着色されているものがあった。

【図31】原図は「年中行事絵巻」。後ろ向きの人物が坐っているのが兀子。

(5) 草摺・草墩

草摺・草墩（そうとん）は、『国語大辞典』によると、宮中の座具の一つ。延喜式（九二七）によると、藁を芯にして、高さ一尺三寸（約四〇センチ）程に丸く作り、上を錦の布地で包んだ一種の腰掛け。諸臣の束帯際の殿上の腰掛。女藏人も陪膳の座に用いる。小右記 永祚元年三月三日（九八六）に「理髮着威儀装束、居草摺、不似例儀」と見える。『週刊朝日百科・源氏物語』（一九）によると、兀子と同じく宮中で使用された腰掛け。真薦まこゝなどを芯として高さ約四〇センチほどの円筒形に作り、上面と周囲を錦や絹で覆った。身分によって、生地や色に差があった。男性は束帯装束用で、后妃や女官も使用した。源氏物語では、兀子とともに用例はない。

『大漢和辞典』で「草摺」をひくと、敷物の一種。中古、庭中の儀式に用いられたもの。又、庭上で舞楽を行う時、舞人が休むための腰掛け。草墩。名目抄の雑物に草墩と見える、とある。「墩」は漢語で背もたれのない座具を意

【図31】兀子



『国語大辞典』より

味するが、「草摺」の項目では漢籍の出典を引いていないことから、「草摺」は和製漢語の可能性が高い。宮中の座具とはいえ、背もたれがなく、草で作られていること、女藏人や楽人なども用いたことから、あまり格式の高い座具ではなかったようである。実際、もともと中国でも「墩」は「兀子」よりも格式の低い座具であった。

【図32】原図は「年中行事絵巻」。

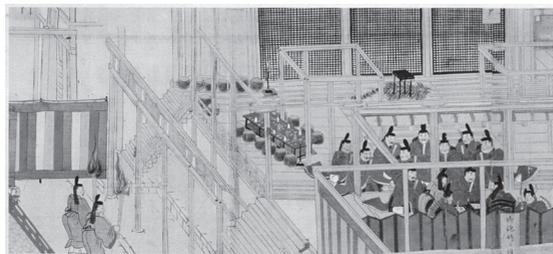
【図33】原図は「年中行事絵巻」。新年に行われる内宴の後の宴席の準備。台盤の上に料理が盛りられ、周りには草摺が並ぶ。

(6) 椅子

椅子(いし)は、『古語大辞典』によると、「椅子」の「倚」はよりかかる、の意。平安時代には「いし」、宋音渡来以後は「いす」という。公卿が用いた腰掛けで、後ろによりかかる所のあるものをいう。四角、四脚で左右に勾欄こうらんをつけ、後ろによりかかる鳥居形を立て、上に茵いんを敷く。天皇の用として、常に紫宸殿と清凉殿の間に置かれるものがあり、前者は黒柿、後者は柴檀で作られている。これを「御椅子」という。椅子を置くことを「椅子を立つ」という。

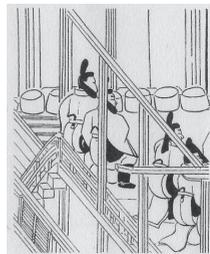
『和名類聚抄(九三四頃)』に「椅子、本朝式に云はく、紫宸殿に黒柿の椅子を設く」と見えるほか、『武家名目抄(一一八六〇)』に「椅子イシ 初任の公卿着座の時、吉

【図33】草摺



『週刊朝日百科・源氏物語』(一九)より

【図32】草摺



『国語大辞典』より

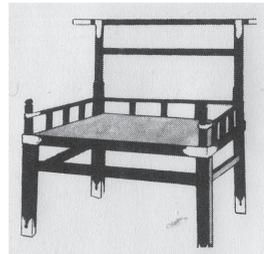
日を撰びて之を作り、庁に立たしむる也」と見える。また、源氏物語（若菜上）（二〇〇一〜一四頃）に「寝殿の放出を例のしつらひて、螺鈿のいし立てたり」と見えるほか、今鏡（藤波上）（二二七〇）に「御椅子とて殿上のおくのざのみにたてられ侍るなるべし。したんにてつくられて侍るなるを、昔うだのみかど、まだ殿上人にはしましてなりひらの中将とすまひとらせ給て、「左右の」かうらんうちをらせ給けるを」と見える。

『週刊朝日百科・源氏物語』（一九）によると、鎌倉時代以降は「椅子」とする。鳥居形の背もたれのある方形の椅子。肘掛けがつくものと、ないものがある。官庁では、親王と中納言以上に椅子が許され、五位以下は漆床子、その他は白木床子を使用した。また、宮中の儀式では、天皇用で紫宸殿に置くものは黒柿製、清涼殿には紫檀製、皇后用は紫檀地の螺鈿などが用いられた。使用する時は、座上に錦の褥を敷き、椅子の下には「毯代」と呼ぶ敷物を敷いた。源氏物語（若菜上）では、紫の上主権の光源氏四十の賀で使用されている。

【図34】 正倉院御物。

【図35】 官庁では親王と中納言以上のみ椅子に坐ることが許された。

【図34】 椅子



『古語大辞典』より

【図35】 椅子



『週刊朝日百科・源氏物語』（一九）より

四 結語

以上、さまざまな座具の歴史を具体的に見てきたところで、「とこ・しとね・むしろ・ふすま・ござ・わろうだ・ふとん」などの語彙の出現年代、及びその後の変遷を年表にまとめてみた。こうしてみると、古くからあるやまとことばで現在まで残っているのは、「ねどこ」(寢床)を意味する「とこ」を別にする、敷物の総称である「むしろ」と「たたみ」だけとなる。「むしろ」を重ねたものが「たたみ」とすると、「たたみ」は「むしろ」から派生した語といえる。基本にあるのは「とこ」で、この上

「とこ・しとね・むしろ・ふすま・おまし・ござ・わろうだ・ふとん」の出現年代

8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20世紀
 平安 鎌倉 江戸

とこ (床)【寢床として】.....

むしろ (席・筵)【敷物の総称】

【座具】(多様な形状).....

【寝具】上席.....

たたみ (畳)【薄い敷物の総称】身分に応じた形状と縁

→鎌倉時代以降、現行の厚畳が一般化.....

あぐら (呉床・胡床・胡坐).....〈坐法の意味に転化〉

→江戸時代以降は床几

わろうだ (円座)

ひざつき (膝突)

しとね (茵)【座具】.....→座蒲団に取って替わられる

(褥)【敷き蒲団】.....→蒲団に取って替わられる

ふすま (衾)【掛け蒲団】.....→蒲団に取って替わられる

(襟袖つき→長方形)

しきもの (敷物)【敷物の総称】

しじ (榻)【座具】〈車の轆を載せる台に特化〉

床子 (外来語)【座具】

兀子 (外来語)【座具】

椅子 (外来語)【座具】

→鎌倉時代以降椅子へ.....

草墊 (和製漢語)

おまし (御座)

御座 (呉音) 御座 (漢音) 外来語 座の尊敬語 → 敷物一般へ

【座具】上蒲 草席 御狹筵.....

【重ね畳】上畳、御座 畳

蒲団 (唐音) 外来語 (円形)

【座具】→座蒲団 (正方形).....

→【寝具】へ.....

にさまざまな座具や寝具を置いた。敷物としての「ひざつき」がいつまで使われたかは不祥であるが（文献上は一六世紀まで確認できる）、江戸時代には入門時に師匠に持参する礼物の意味で使われている。

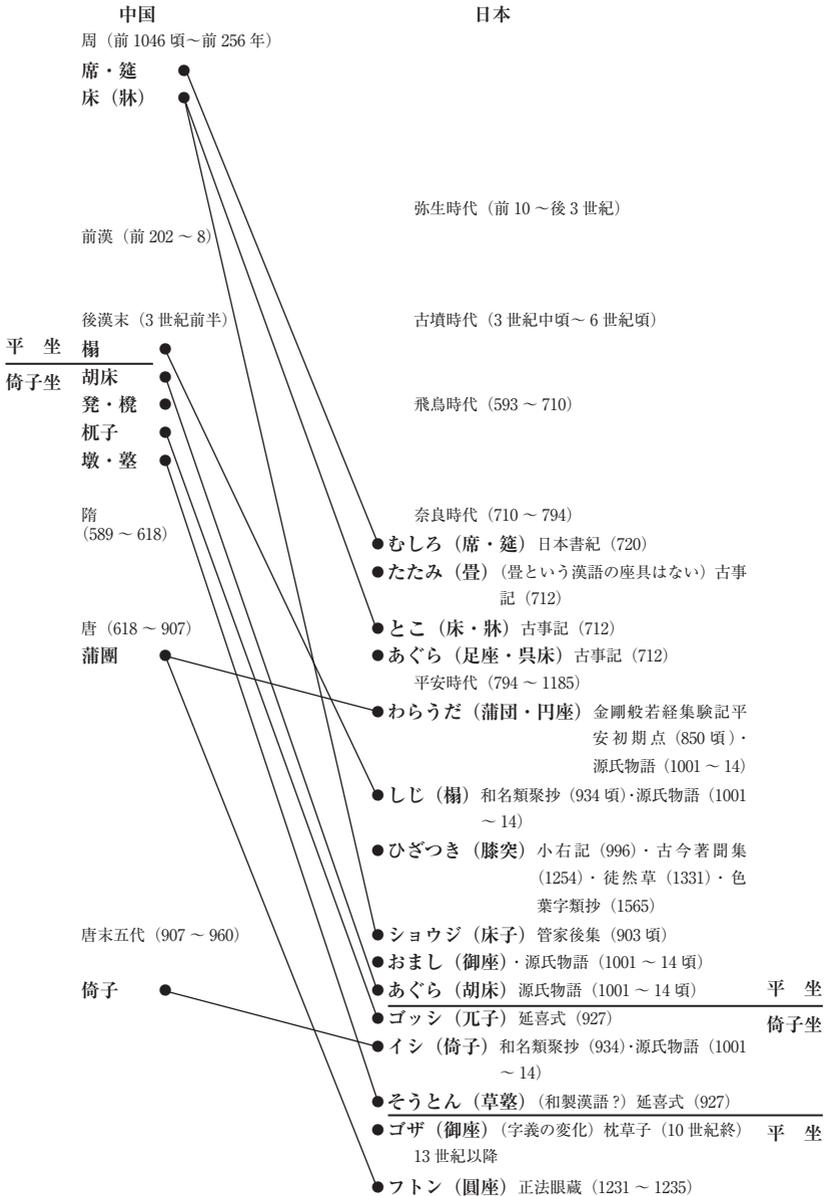
「むしろ」のうち、寝具としての「上席」^{うはむしろ}は後に「しとね」（褥）に取って替わられ、さらに外来語の「敷き蒲団」に取って替わられ、現在では雅称としてのみ残っている。座具としての「しとね」（茵）も近世になって外来語の「座蒲団」に取って替わられた。掛け蒲団としての「ふすま」（衾）も古くからある語であるが、これも近世になって「掛け蒲団」に取って替わられた。なお、座具としての外来の「胡床」は、江戸時代以降は床几と呼ばれ、使われ続けた。

一〇世紀になると、外来語として榻、床子、兀子、椅子などの座具がもたらされる。このうち、榻は車の轆を載せる台に特化し、やがて消えていく。床子や兀子も宮中を除いては、永続することはなかった。椅子は鎌倉時代以降、椅子となり、今日まで使われ続けている。草墊は和製漢語のようで、やがて消えていった。

一一世紀になると、「おまし」に「御座」と漢訳するようになる。その後、「御座」を「ゴザ」と呉音で音読みするようになる。御座と漢音で読むと、天皇の坐る座を意味したが、「ござ」と書くことにより、尊敬の意は薄らいでいき、後に「むしろ」に類似する敷物として現在でも使われている。

続いて、やまとことばの座具名と漢語との関係を、時間軸にそって対比してみたのが【図36】である。

【図 36】 やまとことばの座具名と漢語（名称の初出）



※図の年代表記のスケールは必ずしも実年代を正確に反映していない。例えば、周代と漢代（奈良時代も同様）との間は、もっとスペースを空けるべきであるが、紙面の関係でこのようにした。

※「あぐら」の場合、もともとの高い台と、外来の胡床とを分けて書いた。坐法が両者で平座と椅子坐に別れるからである。

※中国で生まれた座具に関しては、漢語で表記している。対して、やまとことばは、ひらがなで表記している。但し、ショウジ、ゴッシ、イシ、ゴザ、フトンなどカタカナで表記したのは、漢語を音読みしたもので、対応するやまとことばはない。つまり、外来語である。「そうとん」は和製漢語と思われるので、ひらがなで表記したが、座具そのものは中国のものである。

※これは、あくまで座具の「名称」の初出を表す。この場合、名称と物とが一致していたのか、という問題が生じる。つまり、文献などを通して漢語の名称だけが入ってきたのか、それとも現物が入ってきたことに伴い、その名称も入ってきたのか、という事である。おそらく奈良時代には、すでに現物が入っていた可能性が高いし、国産化もされていたと思われる。但し、最初に「床」の字を当てた「とこ」は、厳密には座具ではない。また、「おまし」には座具の意味もあるが、「おましどころ」には座具の意味はない。

※座具として「物」はその後も使われ続けている。例えば、中国における席や床、胡床、蒲団、椅子などは、唐末五代以降も、使われ続けているし、同じように、やまとことばのむしろ、とこ、あぐら、ござ、ふとんなども現在まで使われている。物があれば、当然、名称も存在し続けた。

※平座と椅子坐の区別は、座具に対応したものであって、姿勢そのものが消えた訳ではない。但し、中国の場合、宋代以降は椅子坐が中心となる。日本では、奈良時代以降、平座と椅子坐の座具が併存していたが、姿勢としての椅子坐が一般庶民にまで広く普及していくのは明治時代になってからである。

我々は【図36】から何を読み取れるであろうか。図の如く、時間軸にそってやまとことばと、それに当てた漢字を比較してみると、「むしろ」に対して「席・筵」を、「とこ」に対して「床(牀)」を、「しじ」に対して「榻」を、「あぐら」に対して「呉床」や「胡床」を、「わらうだ」に対して「圓座」を、「おまし」に対して「御座」を当ててきたことになり、「胡床」を別とすると、いずれも妥当な漢訳であったといえる。

「床子」「兀子」「蒲團」「椅子」は外来語なので、そのまま音が用いられた。「御座」は、「おまし」の漢訳であったと思われるが、その後、これを音読みするようにもなったが、音読みしても基本的な字義は同じである。ただ、「ゴザ」(呉音)と「ギョザ」(漢音)と読み分けることで字義の使い分けを行ったが、やがて本来の字義が薄らいでいく。また、「草整」は和製漢語を音読みしている。

但し、時代を遡るほど、漢語とやまとことばの間には数世紀に及ぶタイムラグがあった。これは日本には文字がなかったからで、必ずしも語彙が存在しなかったわけではないが、紀元前からあった「席・筵・床」などが、やまとことばの漢訳に使われるようになるまでには、千年近い開きがあった。漢末に現れた「榻」「胡床」「床子」「兀子」などの場合、四〜五百年に短縮されると、遣唐使の影響もありタイムラグはさらに解消される。

中国で胡床が普及しはじめる魏晋南北朝とは、二二〇年の後漢の滅亡から五八九年に隋が統一を回復するまでの約三七〇年間の分裂時代をいう。この間、日本はまだ古墳時代、及び飛鳥時代で、時間的には大きな開きがある。古事記にやまとことばの「阿具良」や漢語の「呉床」の語がでてくるが、古事記が編纂された七十二年は、中国では随王朝(五八一〜六一八)も滅び、唐王朝の復興にあたる玄宗皇帝(李隆基)の治世が始まった年である。隋唐代といえば、胡床が家庭にも普及していった時期であり、遣隋使(六〇〇〜六一八)や遣唐使(六三〇〜八三八)らによって、榻や胡床の実物が日本にももたらされた可能性は高いし、模して国産品が作られたことも考えられる。

「蒲團」は留学僧を介して日本にもたらされたと思われるが、当時はこれを「わろうだ」讀んだし、唐末五代に普及した「椅子」となると、現物が輸入されたと考えられ、ほぼ時間差はなくなる。但し、これらの舶来の座具は当時はまだ宮中、もしくは禅宗寺院内での使用に限られていた。

なお、漢語の「床」の場合、二回にわけて日本に入ってきた。一回目は八世紀で、古事記にて「あぐら」に「床」の漢字を当てたこと、二回目は一〇世紀以降、大きめの座具としての「床子^{シヨラジ}」の現物が入ってきた。二回目の場合は現物なので、漢字の当て字ではなく外来語として「シヨウジ」の音を受け入れた。座具や寝具としての漢語の「床」の字義は変わらない。なお、「床子」のところでも触れたが、「子」というのは口語的な表現であり、同様のことは「兀子^{ゴツシ}」「椅子^{イシ}」にもいえる。当時は俗称として呼ばれていたのが、いつの間にか正式な名称となっていた。因みに、宋代に転換したとされる「箸^{ジュ}」から「筷子^{クワイイ}」への移行も、これと同じ現象であった。(注3)

漢語の「蒲團」も、二度の波があった。ほぼ同時代であった平安時代に「蒲團」を「わらうだ」と訓読みしたほか、一三世紀になってから再度、外来の蒲團^{フツン}として凹形の座具が入り、やがて座蒲團と寝具へと字義が変化していく。

第二節で述べた「凳子^{トウシ}」(図15)「さまざま形状の凳子」を参照)はどういう訳か、日本に入ってくることはなかったようである。本節の【図28】「胡床」の図は、形状としては「長凳」に近いが、こちらの方が造りは精緻である。

座具の漢字表現に見られるタイムラグは、文明の歴史の深度の違いからくるものであり、当然と言えば当然である。注目すべきは、平安時代以降、そのタイムラグが縮小されていったことである。また、外来語として胡床、床子、御座、蒲團などの文物とことばも入ってきて、日本化していくが、古くからあるやまとことばの体系が大きく入れ

替わることはなかった。むしろ、御座や蒲団に見られる如く、日本的なものに変えていきながら、座具や寝具のバリエーションを豊にしてきたといえる。

タイムラグの縮小は、遣隋使や遣唐使などによって、直接、中国の文物が日本にもたらされた結果であろう。これにともない、一〇以降は、椅子ももたらされる。これは両国の身体技法の変化を考える上で、決定的な出来事であった。腰掛けてすわる座具としては、古くは「胡床」や「墩」「凳」「兀子」などがあったが、唐末五代に普及しはじめた「椅子」は背もたれがある本格的な腰掛け用の座具であった。

先述の如く、中国では、西アジアから伝来した「胡床」や、仏僧が用いていた「繩牀」などを経て、魏晋南北朝のころから徐々に椅子坐の習慣が広まり、宋代にはほぼ平坐から椅子坐の生活へと変化していく。日本でも、椅子は源氏物語にも登場するなど、貴族の間では用いられていたが、中国のように一般庶民が椅子坐の生活に移行していくことはなかった。それには家屋の構造や身分社会など、さまざまな要因があるが、椅子坐が広く普及していくのは明治維新後まで待たなければならなかった。

【図36】に示したとおり、中国では、席、筵、床、榻までが平坐で、胡床から椅子坐へと変化していく。もともと、榻はその高さ故に、腰掛けて坐することもあったようである。源氏物語でも、「しじ」（榻）に腰掛ける例がある。唯一の例外は僧侶が座禅の際に坐る「蒲団」である。

一方、日本をみると、もともとは平坐であったが、外来の座具である「胡床」が入ってきて、場合によって椅子坐をするようになる。しかし、その前後に「わらうだ」や、外来の「床子」など平坐して用いる座具が入ってくる。その後、「兀子」や「墩」「椅子」が入ることによって再び椅子坐の座具が用いられるようになる。ところが、再度、「御座」を日本化したり、平坐して用いる座具である「蒲団」が入ってくる。要するに、中国の場合、仏教と関わ

りの深い「蒲団」を除くと、「胡床」を契機として椅子坐の座具に入れ替わっていくのに対し、日本の場合、「胡床」が入ってきてても平座の習慣が廃れていくことはなく、その後も平坐用の座具と椅子坐用の座具とが交互に入り混じる情況が長らく続いた。

椅子そのものはほぼ同時代の日本にも入ってきたにもかかわらず、広く一般庶民に普及するまでに九〇〇年近いタイムラグがある。もつとも、中国でも魏晋南北朝時代から宋代までの約七〇〇年間という長い時間を経て椅子坐へと移行していったおり、この意味では同じような経過を辿っているともいえる。

現在の日本は、椅子坐に移行しても、「とこ」や「たたみ」「むしろ」「ござ」など、平座して用いる座具を使い続けている。しかしながら、都市部における新築の家やマンションでは、近年、畳の部屋が消え、フローリングとなっている。「とこ」はベッドとなり、「畳」の代わりにフローリングの上にはカーペットが敷かれるようになってきている。住宅環境でいえば、現在の日本は、未だ椅子坐への移行の過渡期のまっただ中にあるともいえる。その一方で、野外の花見などでは「ござ」や「むしろ」に代わって、ブルーシートが用いられているが、平座の習慣を残している。武術や芸事では平坐（正坐）は不可欠な身体技法であり、こうした伝統が継承される限り、これからの日本人は、椅子坐と平坐の習慣をうまく使い分けながら暮らしていくことであろう。

やまとことばにおける座具や寝具の歴史を振り返ってみると、明治時代までは中国の文物を、明治以降は西洋の文物を取捨選択しながら取り入れ、いつの間にか日本化して使いこなしてきた。本稿で分析した如く、座具や寝具においても、同様の現象が起こっていたことを確認することができた。

注

- (1) 二〇〇二「炕のある暮らし—遼寧省新賓県満族自治県の農村調査から」『武蔵大学人文学会雑誌』三四卷一号、二〇〇四「炕のある暮らし（其の二）—延辺朝鮮族自治州の概況調査から」『武蔵大学人文学会雑誌』三五卷一、二〇〇四「炕のある暮らし（其の三）—黒竜江哈爾濱郊外の農村概況調査から」『武蔵大学人文学会雑誌』二五卷三号、二〇〇九「中国食事文化の研究—食と家族をめぐる歴史人類学」風響社、二〇一〇「銘々膳からちゃぶ台へ—日本人の食事方法の歴史的転換点」『武蔵大学人文学会雑誌』四一巻二号、二〇一六「跪拝の誕生とその変遷」伊東貴之編『心身／身心』と環境の哲学—東アジアの伝統思想を媒介に考える—及古書院、二〇二一「身体技法（跪拝）からみる中国における典礼問題の一考察」伊東貴之編『東アジアの王権と秩序—思想・宗教・儀礼を中心として』及古書院
- (2) なお、同様の手法という観点から、中国古代及び日本に伝わった幕について書いた論考に、二〇二二「幕の小宇宙—古代中国における幕の誕生と展開」『武蔵大学人文学会雑誌』第五四巻第三、四合併号がある。
- (3) 中国古代から現代までの座具や坐法に関しては、「はじめに」の注（一）で触れた拙著に詳しい（二〇〇九『中国食事文化の研究—食と家族をめぐる歴史人類学』風響社）。引用文献の詳しい出典や原文に関しては、こちらを参照いただきたい。
- (4) 朱恵良一九八六『中国人的生活』幼獅文化事業公司（台湾）（筒井茂徳・蔡敦達共訳一九九四『中国人の生活と文化』二玄社）
- (5) 黎虎主編一九九八『漢唐飲食文化史』北京師範大学出版社
- (6) 藤田豊八一九二二「胡床につきて」『東洋学報』一二巻四号
- (7) 藤田豊八前掲書
- (8) 中華書局版『後漢書』十一冊志第十三三二七二頁
- (9) 藤田豊八前掲書
- (10) 黎虎主編前掲書より。この一文は、『資治通鑑』『唐紀』にみえる「御大繩牀」に対する注として付されている、程大昌の「演繁露」に見える。
- (11) 『洛陽伽藍記』は邦訳がある。入矢義高・森鹿三・日比野丈夫訳一九七四『洛陽伽藍記・水経注』平凡社（中国古典文学大系）。訳者の入矢によると、「繩坐」とは「繩牀」のことで、これを注して「禪牀の一種で、木製の枠と脚のほかは、縄か籐を編んで作る。禪宗寺院では後世も用いられる」としている。
- (12) 鎌倉時代における外来文化としての「禪宗」に関しては、村井章介二〇〇五『東アジアのなかの日本文化』放送大学教育振興会参照。鎌倉時代後半の茶会（これも宋西が中国からもたらした禪宗文化の一つ）が、中国式に椅子に坐って賑やかに行われていた

ことや、来日した僧らが椅子に坐っている肖像や彫刻などが紹介されている。

(13) 藤田豊八 前掲書

(14) 尚秉和 一九三九 『歴代社会風俗事物考』 商務印書館 (秋田成明編訳 一九六九 『中国社会風俗史』 平凡社 (東洋文庫)。

(15) 藤田豊八 前掲書

(16) 古語に関しては、久松潜一・佐藤謙三編 一九七三 『角川新版 古語辞典』 角川書店、中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編 一九八二
 一九九九 『角川古語大辞典』 (全五巻) 角川書店、国語に関しては、西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 一九九四 『岩波国語辞典』
 (第五版) 岩波書店、小学館国語辞典編集部編 二〇〇六 『精選版 日本国語大辞典』 (全三巻) 小学館、古典文学に関しては、日本
 古典文学大事典編集委員会編 一九八三 『日本古典文学大事典』 (全六巻) 岩波書店、漢語に関しては小川環樹・西田太郎・赤塚
 忠編 一九六六 『角川新字源』 角川書店、諸橋轍次編 一九八九・九〇 『大漢和辞典』 全一三冊 (鎌田正、米山寅太郎修訂) 大修館
 書店、白川静 一九九五 『字訓 (普及版)』 平凡社、北京商務院書館・小学館共同編集 一九九二 『中日辞典』 小学館、北京対外經
 済貿易大学・北京商務院書館・小学館共同編集 一九八七 『日中辞典』 小学館、などを活用した。

また、『古語大辞典』から引用する際、古事記や源氏物語などの書名は、煩雑になるので『』を略した。

(17) 『角川新編 古語辞典』によると、「おほみ」から「おほん」に転じた過程は、「おほみ」の「み」が母音脱落して「おほむ」となり、
 さらにm音がn音になって「おほん」になった。「おほんこと」(大御事)というとき、「事」の尊敬語のほか、貴人の死の尊敬語、
 人をいう尊敬語で、「おほんとき」(大御時)というとき、御治世、御世、という意味になる。平安時代では「おほん」が一般的であ
 り、「お」「み」「ご」は限られた場合に用いた接頭語であり、「おん」という仮名書きの例はない。

確かに、源氏物語でも「おん」は単独では四回出て来るが、いずれも「御」と漢字表記されている。また、接頭語の「お」の例
 は「おまし」(御座)「おまへ」(御前)「おもと」(御膳)などに限られる。「ご」も「御前」や「御覧」など漢語にしかついていな
 い。但し、「おほむ」は単独では二回しか出てこない。また、接頭語の「み」は多数出てきており、少なくとも源氏物語に限って
 言えば、「み」が限られた場合というのは当てはまらないようにみえる。

(18) 角川書店の『古語大辞典』では、「お」の項目で、平安時代の「おまし」「おまへ」など、マ行音を音頭とする語に「お」の付いた
 例は接頭語「おほ」の転じたものであるとする説もある、と紹介している。その一方で、「おまします」(御座)の項目では、「ま
 します」に接頭語「おほ」を冠して敬意を強めた形の転、と言いつつ切っている。しかし、その類語である「おまし」(御座)や「お
 ます」(御座)では、「お」を冠しているとし、記述に一貫性がない。

もっとも、「おほみ」(大御)の語源は、「おほ」(大) + 「み」(御)が合体したものであり、その「おほみ」から「おほん」↓「お
 ん」↓「お」と転じていっても、元を辿れば同じ「おほ」(大)なので、「おほ」と「おほみ」を厳密に別系統とするのはあまり意

味が無く、どちらの側から「お」に転じたとしてもおかしくはない。

(19) 岩波書店の『源氏物語索引』では「みやすみどころ」は「やすみどころ」の項目で扱われていて、「みやすどころ」の項目とは分けてある。当てた漢字も異なるし、字義も変化しているというところで、このような対応をしたのであろう。

(20) 『古語大辞典』は、あぐら（呉床・胡床・胡坐）の説明として、②椅子よりも大きい、一種の腰掛け、としている。「胡床」は椅子より大きい座具ではないので、誤解を招く記述となっている。本稿では引用の際に「椅子よりも大きい」を削除した。なお、「胡床」を官人、楽人などが用いる、としているが、これは平安時代の日本の話であって、中国では使用する人が職種によって限定されていた訳ではない。

(21) 和名類聚抄が引く「胡床 風俗通に云ふ。靈帝胡服を好み、京師皆胡床（胡床）を作る」は、「二 中国における座具の変遷」で原文を引用している。引用箇所は注（8）に示している。

(22) ここで私が「漢訳」という語を使う意図を説明しておきたい。入沢達吉が一九二〇年に書いた「日本人の坐り方に就て」（『史学雑誌』三一巻八号）の中で、「あぐら」というのは本来、天子の坐る御台の名称であり、古い書物には「阿久良」「阿婁羅」と書いていて、これを漢訳して「胡床」とか「呉床」などと書くようになった、と指摘している。この「漢訳」という表現は、私にとつて目から鱗であった。というのも、訓読みというのは、先に漢字があつて、それに相当するやまとことばを当てたものだと思つてしたが、実際には、その逆もあつた、ということに気付かせてくれたからである。

もちろん、先に漢字があつて、それに訓読みを当てた例もある。平安時代に編まれた漢和辞典である『新撰字鏡』（八九二成立）や、『和名類聚抄』（九三四頃）、『類聚名義抄』（一〇八一—一〇〇頃）などでは、漢字に対して和訓がつけられている。従つて、全てが「漢訳」された訳ではなく、その逆もあつた。しかしこの場合は漢語の「和訳」であり、結果としては、同じ行為ということもできる。漢字から見たら、やまとことばは「訓読み」であるが、逆にやまとことばからみたら、漢字は「漢訳」したものなのである。漢字と訓の関係を、従来の「当て字」の関係ではなく、「漢訳」とすると、両者の関係がより明確になると考え、本稿では敢えて「漢訳」を使うこととする。

漢文で書かれた『日本書紀』は対外的に東アジアの漢字文化圏の読者に向けて書かれた意味合いもあり、「漢訳」と言つてもよからう。但し、正確に言うと、漢訳不可能な歌謡を別として、その原文が残されている訳ではなく、「漢訳」というよりは、初めから漢文で書かれている。後世の日本人は漢文から「原文」を推測しながら解説していくしかなかった。その後、かな文字が作られて以降も正式な文章は漢文で書かれ続けた。あるいは、漢字表記に直されてきたが、この場合の想定読者は明らかに日本国内の知識人であった。従つて、「漢訳」というのは大げさな気もするが、やまとことばの自立性を強調するためにも、敢えて「漢訳」を使うこととする。本稿が漢訳された「和語」ではなく、「やまとことば」を使うのもこうした立場からである。

(23) 「箸」から「快子」を経て「筷^{くわいす}子」に変化していった過程に関しては、拙稿の『中国食事文化の研究』の第二章にて詳述している。おそらく、明代になって江南地方から使われ始めたことは間違いないさそうである。船乗りにとって「箸」の音が「住」（航行が止まる）に通じるため、船上では逆の早く進む意味の「快児」と言うようになり、後に竹製であったことから竹冠がつけられて「筷^{くわいす}子」になったようである。

(24) 平安時代には椅子が入ってきたにもかかわらず、日本では一般庶民はもちろんのこと、貴族階級の間でも椅子坐が普及することとはなかった。日本で椅子坐が定着しなかった理由を、宮崎市定は、建築様式の差違に求めている。即ち、気候の乾燥した華北では内部を土間にし、椅子を置くことができたが、雨の多い日本では、湿気を防ぐためにも縁を高くして板敷きにしなければならず、かといって風雨を防ぐために屋根も高くすることが出来ず、こうした家屋の中では椅子坐は不向きであり、平坐の習慣に逆戻りした、としている（一九五八「東洋史の上の日本」『日本文化研究』）。確かに、現在の日本で急速に進んでいる椅子坐への移行は、畳の部屋がフローリングの部屋に取って代わられ、冷暖房や除湿もエアコンが行う、という家屋構造の変化をとまなっていることを考えると、宮崎の説には説得力がある。

文献リスト

【日文】

青木正児編・内田道夫解説

一九六四『北京風俗図譜』一、二 平凡社（東洋文庫）

入沢達吉

一九二〇「日本人の坐り方に就て」『史学雑誌』三二巻八号

西澤治彦

二〇〇二「炕のある暮らし―遼寧省新賓県満族自治県の農村調査から」『武蔵大学人文学会雑誌』三四巻一号、

二〇〇四「炕のある暮らし（其の二）―延辺朝鮮族自治州の概況調査から」『武蔵大学人文学会雑誌』三五巻一号

二〇〇四「炕のある暮らし（其の三）―黒竜江哈爾濱郊外の農村概況調査から」『武蔵大学人文学会雑誌』二五

卷三号、

- 二〇〇九『中国食事文化の研究—食と家族をめぐる歴史人類学』風響社
二〇一〇『銘々膳からちゃぶ台へ—日本人の食事方法の歴史的転換点』『武蔵大学人文学会雑誌』四一巻二号、
二〇一六『跪拝の誕生とその変遷』伊東貴之編『心身／身心』と環境の哲学—東アジアの伝統思想を媒介に考
える』及古書院

- 二〇二一『身体技法（跪拝）からみる中国における典礼問題の一考察』伊東貴之編『東アジアの王権と秩序—
思想・宗教・儀礼を中心として』及古書院

- 二〇二二『幕の小宇宙—古代中国における幕の誕生と展開』『武蔵大学人文学会雑誌』第五四巻第三・四合併号
藤田豊八

- 一九二二『胡床につきて』『東洋学報』一一二巻四号

宮崎市定

- 一九五八『東洋史の上の日本』『日本文化研究』一卷 新潮社、一九七六『アジア史論考』下所収 朝日新聞社、
一九九三『宮崎市定全集』二二巻所収 岩波書店。

村井章介

- 二〇〇五『東アジアのなかの日本文化』放送大学教育振興会

〔辞典類〕

久松潜一・佐藤謙三編

- 一九七三『角川新版 古語辞典』角川書店

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編

一九八二～一九九九『角川古語大辭典』（全五卷）角川書店

西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編

一九九四『岩波国語辞典』（第五版）岩波書店

小学館国語辞典編集部編

二〇〇六『精選版 日本国語大辞典』（全三卷）小学館

日本古典文学大事典編集委員会編

一九八三『日本古典文学大事典』（全六卷）岩波書店

小川環樹・西田太一郎・赤塚忠編

一九六六『角川新字源』角川書店

諸橋轍次編

一九八九～九〇『大漢和辞典』全一三冊（鎌田正、米山寅太郎修訂）大修館書店

白川静

一九九五『字訓（普及版）』平凡社

北京商務院書館・小学館共同編集

一九九二『中日辞典』小学館

北京对外經濟貿易大学・北京商務院書館・小学館共同編集

一九八七『日中辞典』小学館

【中文】

王世襄編著

一九八九『明式家具研究』三聯書店（香港）

胡文彦

一九九五『中国家具』上海古籍出版社

湖南省博物館・中国科学院考古研究所編

一九七三『長沙馬王堆一号漢墓』（上下集）文物出版社

朱恵良

一九八六『中国人的生活』幼獅文化事業公司（台湾）（筒井茂徳・蔡敦達共訳 一九九四『中国人の生活と文化』

二玄社）

尚秉和

一九三九『歴代社会風俗事物考』商務印書館（秋田成明編訳 一九六九『中国社会風俗史』平凡社 東洋文庫）

田家青編著

二〇〇一『明清家具集珍』三聯書店（香港）

中国美術全集編輯委員会編

一九八八〜九『中国美術全集』（全十六冊）文物出版社

毛岱康（副編輯）

一九九八『中国古典家具與生活環境』雍明堂出版（香港）

黎虎主編

一九九八『漢唐飲食文化史』北京師範大学出版社

〔辞典類〕

許慎一

〔後漢〕『説文解字』、一九六三中華書局

劉熙

〔後漢〕『釋名』、二〇〇二『釋名逐字索引・急就篇逐字索引』商務印書館（香港）

〔經書類〕

鄭玄（漢）注・孔穎達（唐）疏

十三經注疏整理委員會二〇〇〇『禮記正義』（十三經注疏 十二・十三・十四・十五）北京大學出版社、竹内照夫

訳注一九七一『禮記』上中下（新釈漢文体系）明治書院

〔正史ほか〕

司馬遷（漢）『史記』裴駟（宋）集解全一〇冊一九七五中華書局、司馬遷 野口定男・近藤光男・頼惟勤・吉田

光邦訳（中下巻は野口定男訳）一九六八〜七一『史記』上中下 平凡社（中国古典文学大系）

班固

〔後漢〕『漢書』顔師古（唐）注全一二冊一九六二中華書局、小竹武夫訳一九七七〜七九『漢書』（全三冊）

筑摩書房

範曄

〔南朝宋〕『後漢書』李賢（唐）等注全一二冊一九六五中華書局、吉川忠夫訓注二〇〇一〜〇七『後漢書』

全十冊・別冊一 岩波書店

陳壽

〔西晋〕『三国志』裴松之（南朝宋）注 全五冊 一九五九 中華書局

脱脱等

〔元〕『宋史』全四十冊 一九七七 中華書局

司馬光

〔北宋〕・胡三省（元）注（北宋一〇八四成書）『資治通鑑』全二十冊 一九五六 中華書局

〔隨筆・地誌ほか〕

桓寬

〔前漢〕『塩鉄論』、馬非百注釈 一九八四 『塩鉄論簡注』中華書局、佐藤武敏訳注 一九七〇 『塩鉄論—漢代の経

済論争』（桓寬編）平凡社（東洋文庫）

陸游

〔宋一二二八〕『老学庵筆記』、李劍雄・劉徳権点校 一九七九 『老学庵筆記』唐宋史料筆記叢刊 中華書局

楊銜之

〔北魏〕『洛陽伽藍記』、楊勇校箋 二〇〇六 『洛陽伽藍記校箋』中華書局、入矢義高・森鹿三・日比野丈夫訳

一九七四 『洛陽伽藍記・水経注』平凡社（中国古典文学大系）

【英文】

Wu, Hung (巫鴻)

1996 *The Double Screen: Medium and Representation in Chinese Painting*. Reaktion Books (中野美代子・中

島建訳 二〇〇四 『屏風のなかの壺中天—中国重屏図のたくらみ』青土社)

